

令和5年度 研究紀要 第49号

豊かな感性と表現する力を育む

—もの、人、こととの関わりの中で—（二年次）

～教師の援助を探る～



富山大学教育学部附属幼稚園

はじめに

平素より本園の教育活動にご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

本年度も、本園の教育・研究活動をまとめた『研究紀要 第49号』を刊行する運びとなりました。

昨年5月に新型コロナウイルスも5類に移行し、幼稚園での教育活動もほぼこれまでの形を取り戻すことができました。また、昨年2月末に園舎内装改修工事も完了し、明るくきれいになった保育室や遊戯室で元気いっぱい活動することができました。6月に開催した保育フォーラムでは、人数制限付きではありましたが、これまで通り、全国の方への公開保育を再開しました。同時に講演会については、より多くの方にご参加いただけるようオンラインで開催するなど、以前の状態にただ戻すのではなく、この数年の間にいろいろと取り組んできたことも活用しながら、これからの時代の幼児教育のあり方について考える1年となりました。

さて本年度は、『豊かな感性と表現する力を育むーもの、人、こととの関わりの中でー(二年次)～教師の援助を探る～』と題して、昨年度からの研究を継続し、本年度は豊かな感性と表現する力を育む教師の援助のバリエーションや質の向上、またどのような援助が求められているのかを見抜くような、教師の見取りに着目し研究を進めました。研究協力員や大学の先生方のご指導、保護者の皆様のご協力をいただきながら実践的な研究に取り組み、令和5年度の研究紀要をまとめることができました。

幼児期における豊かな感性と表現する力の育成は、この後の学びや生活に不可欠となるコミュニケーション能力の育成につながるだけでなく、それを基にした協働的な学びにつながる大切な能力であることは言うまでもありません。非認知能力と呼ばれるものの一つで、近年その育成の重要性が注目されていますが、明示的に指導し、育成できるものではありません。子供一人一人が様々な経験を通して自ら育んでいくことを教師はどのように援助していくか、その手立てをどれだけ教師が身に付けることができるのかを、実践の中で試行錯誤を繰り返し、教師それぞれのアイデアを共有しながらボトムアップしてまとめていきました。そのため、まだまだ抜け落ちている部分も多いかと思いますが、この1年の成果としてご覧いただければ幸いです。

最後に、本年度の研究成果を広く公表し、皆様からのご批評を仰ぎ、今後の教育活動に活かし発展させていくことができるよう努めてまいります。御一読いただき、どうぞ忌憚のないご意見、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月

園長 黒田 卓

はじめに

I	本年度の研究について	1
1	研究主題について	
2	昨年度（一年次）の研究について	
3	本年度（二年次）の研究について	
4	研究内容と研究方法（二年次）	
5	本年度の研究のアプローチ方法	
6	本年度の研究の歩み	
II	本年度の取組	11
1	「援助カテゴリ」一覧について	
2	実践事例と援助の事例表について	
◇事例1	お店屋さんごっこ 援助の事例表	3歳児（10月） 3歳児（9～11月） 12
◇事例2	キャンプごっこ 援助の事例表	4歳児（10月） 4歳児（8～10月） 22
◇事例3	いろいろけえきやさん 援助の事例表	4歳児（12月） 4歳児（11～12月） 32
◇事例4	水族館づくり 援助の事例表	5歳児（12月） 5歳児（11～12月） 42
III	研究のまとめと次年度への課題	52

<資料>

講演記録

「表現する子どもたちと、保育者を見つめて」

愛知教育大学教育科学系 幼児教育講座
学系長・教授

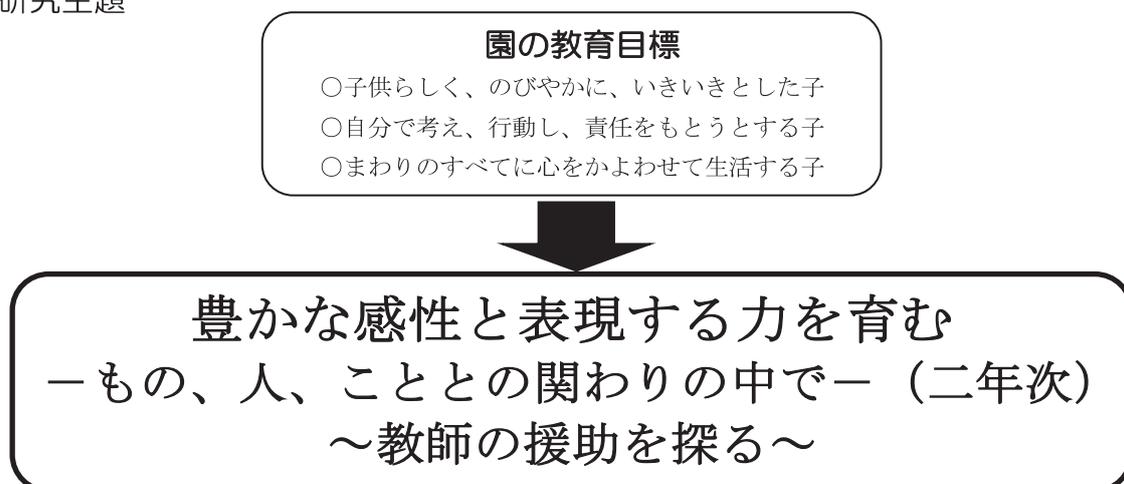
鈴木 裕子 先生

おわりに

研究同人

I 本年度の研究について

研究主題



1 研究主題について

本園では、令和元年度から令和3年度までの3年間、「子供の探究心を育む」という研究主題で研究を進めてきた。その中で、自分が思ったことや考えたことを表現する力、教師や友達に伝える力が探究心を深めていくための一つの要因になっていることに気付いた。このことから、令和4年度より「豊かな感性と表現する力」をどのように育むかを園全体で研究していこうと、本研究主題を設定した。

幼稚園教育要領の「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、「(2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする『思考力、判断力、表現力等の基礎』」が挙げられている。さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中に、「(10) 豊かな感性と表現」とあり、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」とある。

「豊かな感性と表現」は、領域「表現」のみで育まれるのではなく全ての領域の活動全体を通して育まれることにも留意しなければならない。そして、「教師や他の幼児に受け止められることを通して、動きや音などで表現したり、演じて遊んだりしながら、自分なりに表現することの喜びを味わう。」とも示されている。

また、「幼稚園教育要領ハンドブック 2017 年告示版」(無藤隆監修)では、「美しいものや優れたもの、心を動かす出来事などに会ったとき、そこから子供が何かを感じ取る心を『感性』と呼び、そこで生まれた様々な思いや感情を、いろいろなものを使って表すことを『表現』という」とある。

子供たちは、動きや音等で表現したり、演じて楽しんだりしながら、自分なりに表現する喜びを味わっている。教師は、一人一人の子供の表現や工夫に気付き受け止めること、イメージを豊かにしたり、アイデアが生まれやすいような環境を工夫していくこと、そして一緒に表現することを楽しむ姿や友達と表現の方法を工夫しながら遊びを進める姿を認めていくこと等が大切であると考えられる。

2 昨年度（一年次）の研究について

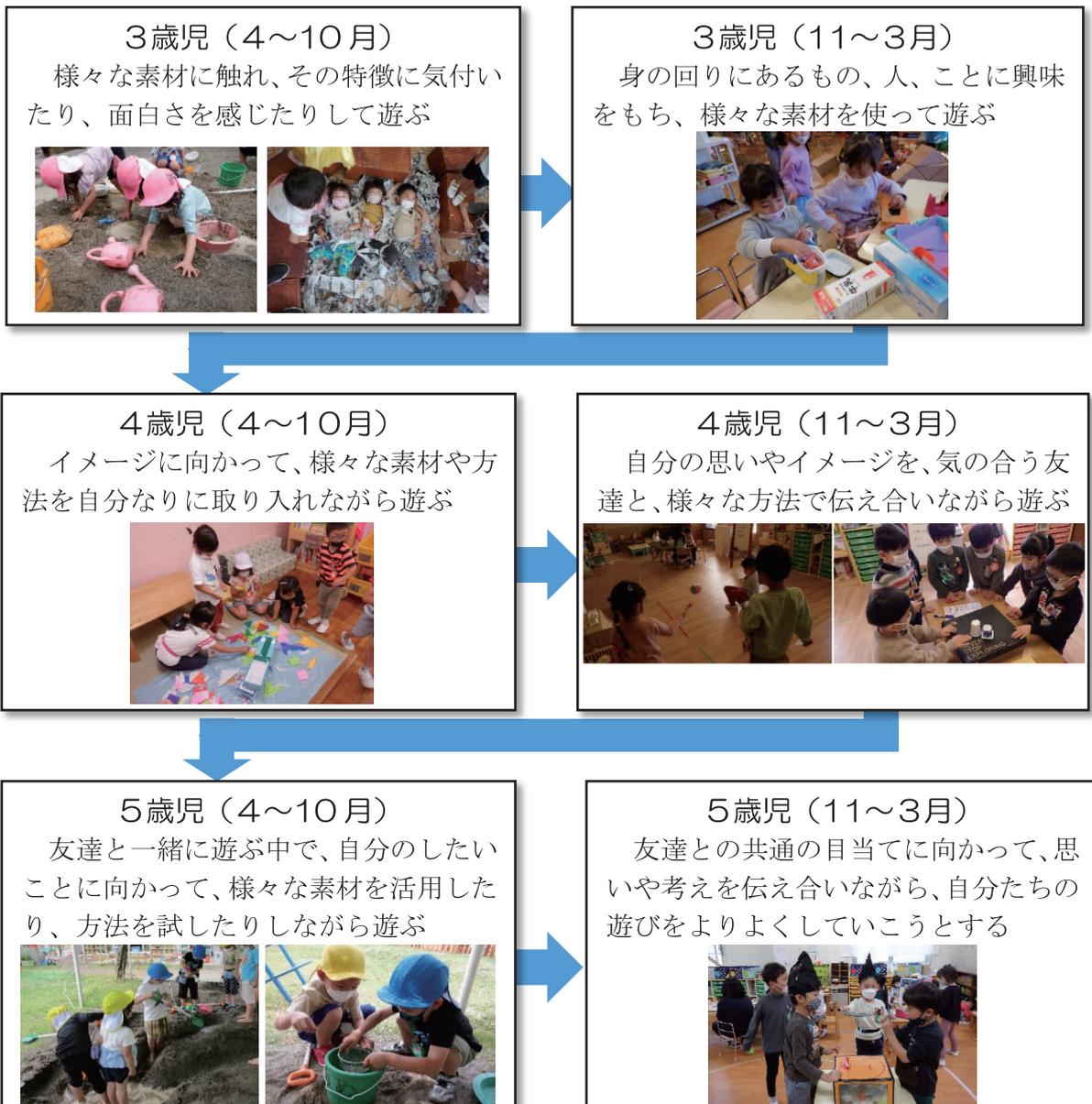
一年次は、子供の豊かな感性と表現する姿を捉えていくことに重点を置いた。また、捉えた表現する子供の姿から、子供がどのようなことを感じているのか、その背景にある心を動かす出来事とは何か、「もの」「人」「こと」との関わりを意識しながら探っていった。

週案の中に「豊かな感性と表現」に関わる記録欄を設け、年間を通して日々の表現する子供の姿の記録を蓄積した。そして、それらを分析したところ、表現する子供の姿は、それぞれの学年で大きく2つの時期に分けられた。

園内研修では、「教師の援助」「友達との関わり」「その他（偶然出会ったもの、偶然起こった出来事や現象等）」の3つの視点を基に表現する子供の姿について複数の教師で協議をした。視点を明確にしたことで、表現する子供の姿の背景にあるものを深く考察することができた。さらに、視点を明確にしたこと、多くの目で保育を見て表現する子供の姿について協議したことは、その後の日々の保育や記録で子供の姿を振り返る中でも、子供の表現する場面を多く捉えたり、子供の心を動かす要因を深く考察したりすることにつながった。

また、これらのことを通して、「表現する子供の姿」の一覧を作成した。

「表現する子供の姿」



3 本年度（二年次）の研究について

一年次の研究から、「友達の関わり」を生むためにも教師の援助が大きく関わっており、教師の担う役割は大きいことに気付いた。そこで、本年度は豊かな感性と表現する力を育むために有効な教師の援助を具体的に探っていく。また、子供が何かを表現するためには、まず、表現したいと思う対象が必要である。表現する意欲をもつことができるように、子供が心を動かし、自らやってみたい、こうしたいと感じられるような感性に働きかける援助についても探っていく必要がある。そして、教師の援助を振り返りながら、さらなる援助の質の向上を図り、子供の豊かな感性と表現する力を育てていきたい。

そこで、二年次である本年度は、「豊かな感性と表現する力を育む—もの、人、こととの関わりの中で—（二年次）～教師の援助を探る～」と新たに副題を設け研究していく。

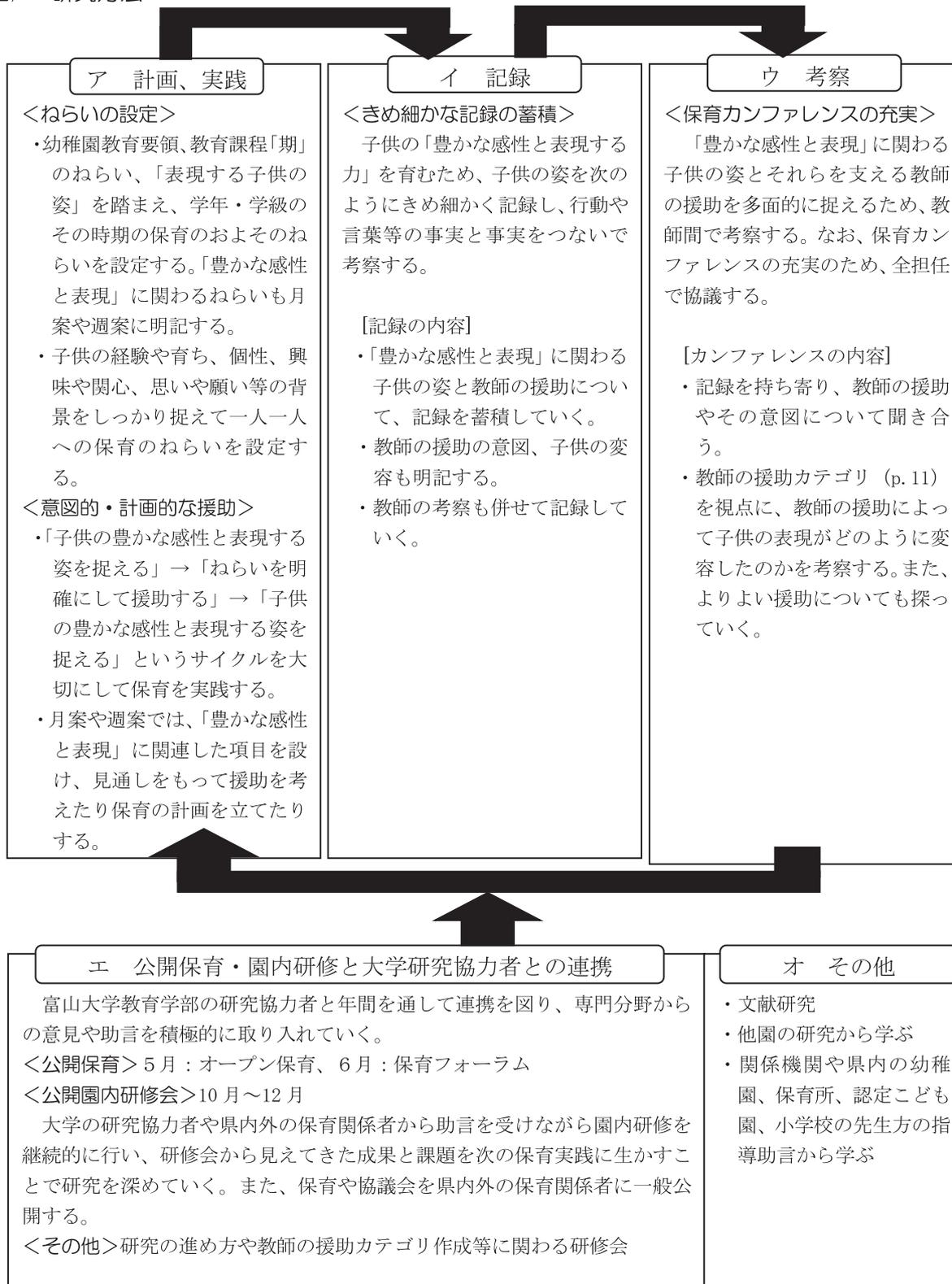
一年次の研究で有効だった記録の蓄積、視点を基にした教師間での考察を本年度も行っていく。本年度は教師の援助を分類したカテゴリ作成し、それらを視点とし、教師の援助について探っていく。

4 研究内容と研究方法（二年次）

(1) 研究内容

幼稚園教育要領並びに附属幼稚園の教育課程や昨年度まとめた「表現する子供の姿」を基にした保育を計画し、実践する。そして、それぞれの学年や時期の表現する子供の姿を支える教師の援助を探っていく。

(2) 研究方法



5 本年度の研究のアプローチ方法

(1) 子供の「豊かな感性と表現する力」を育む保育計画の立案

本園では、教育目標に基づいて教育課程を作成し、そこから年間指導計画、月案、週案、日案を立てている。そこで、子供の「豊かな感性と表現する力」を育むために、月案にはその時期の「表現する子供の姿」、「豊かな感性と表現」に関わるねらい、教師の願いと援助を明記する。(資料1) 週案にも「豊かな感性と表現」に関わるねらいや教師の援助を明記し、保育を行う。(資料2)

(2) 「豊かな感性と表現」に関わる子供の姿と教師の援助の記録を基にしたカテゴリ (p.11) 作成

週案では、保育の記録の中に「豊かな感性と表現」に関わる記録欄を設け、子供の姿と教師の援助の記録を蓄積していく。(資料2) そして、それらの記録の中から各学年、各クラスで期間を決めて感性と表現に関わるそれぞれの援助を分類し、カテゴリを作成する。教師の援助カテゴリの作成は、蓄積された記録を基に教師間で意見交換し、富山大学の先生の助言を受けながら行っていく。

(3) 「豊かな感性と表現」に関わる子供の姿を支える教師の援助を探る園内研修

「豊かな感性と表現」に関わる子供の姿とそれを支える教師の援助を教師一人の視点ではなく、多面的に捉えるため、教師間で考察することが必要である。そこで、保育カンファレンスや公開保育を実施する。保育の中で見られた「豊かな感性と表現」に関わる子供の姿と教師の援助について、作成した教師の援助カテゴリを視点に話し合い、実際に行われていた援助を見直したり、よりよい援助を探ったりしていく。

6 本年度の研究の歩み

月	内 容
4～5月	本年度の研究の方向性を共通理解
5～6月	保育カンファレンスの実施 前年度の研究成果の発表、保育公開 ・オープン保育 5月30日(火) ・保育フォーラム 6月15日(木)
7～8月	保育フォーラムでの学びの共通理解 9月以降の研究についての共通理解
10～12月	公開園内研修の実践と保育カンファレンスによる研究推進 ・公開園内研修① (4歳児 ばら組) 10月20日(金) ・公開園内研修② (3歳児 もも組) 11月10日(金) ・公開園内研修③ (4歳児 さくら組) 12月8日(金) ・公開園内研修④ (5歳児 ふじ組) 12月14日(木)
1～3月	12月までの記録のまとめとそれを基にした研究会議 本年度の研究成果の共通理解 次年度の研究の方向性を検討

資料2 週案

週案	XIV期	12月11日(月)～	12月15日(金)	年長組	ふじ組
先週はクラスで野菜の収穫をしたり、クッキングをしたり、グループの友達と一緒に育てた野菜をみんなで調理したことで特別なおいさや充実感を感じていた。好きな遊びをじっくり楽しみ、友達がいっぱい遊べる姿を願っている。友達が思っていることを伝えたい。そのための素材の提示や場づくりについては、世界で一つだけのアルバムになることを伝え、幼稚園での思い出を込めて丁寧に描くことができればよい。付属小5年生との交流では、お兄さん・お姉さんの優しさに触れながら就学への期待感を高めてほしい。	ねらい	ゆき い わ し の ひ ら き 冬、ヒヤシ ス、友達、魚等	保育資料	友達と思いや考えを伝えたい、一緒に遊びを進めていこうとする。 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 小学生のお兄さん、お姉さんとの関わりを深め、就学への期待感を高める。	
幼児の姿と願いの	内容			友達に自分の思いや考えを伝えたり、友達の思いや考えを聞いたりして遊ぶ。 感じたことや考えたことを様々な素材を使って表現し、かいたり、つくったりすることを楽しむ。 小学5年生と魚釣りゲームをし、一緒に活動することを楽しむ。	
日	11日(月)	12日(火)	13日(水)	14日	
好きな遊び	<ul style="list-style-type: none"> 鬼ごっこ 楽器作り 水族館作り 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの様子を尋ねたり、話し合う場を設けたりし、子供たちが困っていることやもつとこうしたいというところを伝えることができるようにする。(遊びの場所、鬼の関わり方等) 音について子供の感じていることや気持ちに共感すること、その音をより楽しんだり、他のものだったらどんな音がするかなど他の自然物や素材からなる音にも興味をもつたりすることができるようにする。 作ってみたい楽器や音といった子供の表現したいものを尋ね、自分の思いを言葉で表現することができるようにする。また、その中で具体的なイメージを引き出し、必要に応じて素材を提示する。 友達が作っている生き物やトンネルの様子を見たり、ブルーシートやポリ袋等で一緒に飾る場を作ったりすることで、こんなふうに飾りたい、もつとこんなものもあつたらいいというイメージが膨らむようにする 子供の作りたいイメージを認め、それらにあった大きさや形、性質の素材を提案する。また、複数の素材を提案することで、さらにその特長に気がつきながら子供の思いに合ったものを伸び伸びを作ることができるようにする。 	<p>「豊かな感性と表現」に関わる ねらい、内容、評価の観点を明記</p>		
みんなと一緒に	アルバムを作ろう	部屋の飾りを作ろう	誕生会をしよう	「豊かな感性と表現」に関わる教師の援助に下線	小学生のお兄さん・お姉さんと遊ぼう

Ⅱ 本年度の取組

1 「援助カテゴリ」一覧について

本年度は、週案に記録してきた子供の姿と教師の援助の中から、各クラスで期間を決め、感性と表現に関わるそれぞれの援助カテゴリを作成し、どのような意図をもってどのような援助をしてきたのかを把握した。対象とする期間は、各クラスの公開園内研修会を含む期（2か月程度）とし、表現のねらいに関わる場面の記録を各週2つ以上取り上げている。全クラスの記録を基に、感性に関わる援助カテゴリは4、表現に関わる援助カテゴリは13、合計17の援助カテゴリが作成された。

【感性】

A	感じたことに共感する
B	オノマトペで伝える
C	五感を刺激する働きかけ
D	特性を伝える

【表現】

E	環境の構成
F	素材、材料、道具の提供
G	素材、材料、道具の提案
H	見本・モデルの提示
I	遊びの提案
J	表現を受容する
K	イメージを引き出す
L	イメージを膨らませる
M	イメージをつなぐ
N	物語化
O	視覚化
P	周囲に広める
Q	共有する機会の設定

2 実践事例と援助の事列表について

今回、紹介する事例は公開園内研修会で見られた遊びが中心となっている。また「2 保育の実際」では、場面ごとの感性と表現に関わる子供の姿と教師の援助について取り上げ、その援助について考察する。

「子供の姿」には、子供がその場面でどのようなもの、人、ことと関わっていたのかを明記している。「教師の援助」には、【E：イメージに合う素材の準備】のようにカテゴリ名をアルファベットで、そして援助の内容を簡単にまとめて記している。

援助の事列表では、各クラスの対象期間に記録した感性と表現に関わる教師の援助の事例を、カテゴリごとに紹介する。また、援助の内容を簡単にまとめたものをサブカテゴリとし、「援助カテゴリ」の中でもどのような援助が行われていたのかをさらに分類している。

◇事例1 お店屋さんごっこ 3歳児（10月）

1 これまでの子供の姿と遊びの経緯

本園では、研究一年次に3歳児4～10月に見られる表現する子供の姿を「様々な素材に触れ、その特徴に気付いたり、面白さを感じたりして遊ぶ」と捉えた。この姿を期待し、保育の中で援助を続けてきた。ここでは、10月の「お店屋さんごっこ」の事例から教師の援助を紹介する。

3歳児もも組の子供たちは、これまでに砂や赤土、自然物を使った料理作り、クレープ紙、砂や赤土、マリーゴールドやクローバー等の素材や自然物を使った色水のジュース作りの遊びを楽しんできた。また、様々な素材や道具に興味をもち、製作遊びをする姿が多く見られるようになってきていた。すずらんテープのひらひらしている特徴を取り入れてちょうちょや流れ星を作ったり、ペンやクレヨンでは色を付けることができなかつたカップやペットボトルにビニルテープを使って色を付けたりしていた。様々な素材や道具に興味をもって関わり、まずは使ってみることで、作りたいもののイメージを膨らませている。

2 保育の実際

(1) オリジナルカレーを作ろう！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名p.11 参照
<p>テーブルに置かれた綿を見て、興味をもった子供たちが集まって来た。もの</p> <p>何これ！ 使ってみたい！</p> <p>たくさん入れよう！</p> 	<p>①カレー作りセット（綿、画用紙、型抜き画用紙）、ポテト作りセット（黄色画用紙、赤色折り紙）、ジュース作りセット（カップ、花紙、ストロー）、アイス作りセット（新聞紙、お花紙、カップ、型抜き画用紙）を用意し、<u>それぞれの料理作りに必要な材料をセットにして置いておいた。</u>【E：遊びに必要な素材をすぐに使うことのできる環境の構成】</p> <p>②画用紙は、<u>子供が扱いやすい大きさに切って提供した。</u>カレー作りに必要な画用紙は子供たちに必要な色を尋ねて用意した。【F：幼児が扱いやすい大きさに整えた素材の提供】</p> <p>ルウは何色があったらいいかな？</p>  <p>ルウの準備中です。しばらくお待ちくださ～い。</p> 

テーブルには、カレーセットとポテトセットが置いてあったが、その場に集まった子供たちは、全員カレー作りを始めた。もの、人

カレー作りをしたい子供たちが集まってきた。目の前にある材料から使いたいものを選び、夢中になって作っていた。もの、人

自分のイメージに合った形や色の材料を選んだり、作っていく過程でさらにイメージを膨らませたりして、一人一人が自分のオリジナルのカレーを作った。もの、こと

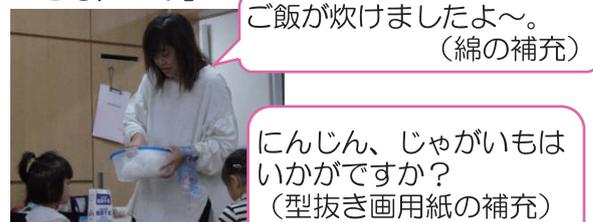


いっぱい切って具沢山にするよ。

激辛カレーだよ。うへへ～。

③そこで、ポテトセットを別の場所へ移動し、「カレーを作ってみたい人はこちらへどうぞ、ここがカレー作りコーナーだよ」と周囲に知らせた。**【E：環境の再構成】【P：幼児がしている遊びを周りに知らせる】**

④テーブル上の材料の減り具合を観察し、カレー作りのイメージに合う声をかけながら、随時、綿や画用紙等の材料を補充した。**【F：素材の提供】【N：イメージを膨らませる声かけ】**



ご飯が炊けましたよ～。
(綿の補充)

こんじん、じゃがいもは
いかがですか？
(型抜き画用紙の補充)



こちらに3色のカレールウ
がありますよ。
(画用紙の補充)

⑤一人一人の作っている様子を捉え、コーナーにいる子供たちに伝わるように声をかけた。**【J：幼児の表現を受容する声かけ】【L：イメージを膨らませる声かけ】【P：友達がしている作り方を広める】**

自分の工夫したところを話したり、友達
している作り方を真似たりしながら、さらに
作り込んでいた。人、こと

辛いカレーにしようかな。甘くしようかな。



私もいっぱい切ってみよう。具沢山だ～!

いろいろな色のルウが
入っているね。

こんなに小さく切る
ことができたんだね。



たくさん画用紙を切ったんだね。
いろいろな具が入っていておいしそうだね。

教師の振り返り

- ①製作コーナーの一角に、折り紙や画用紙、テープ類、空き箱、芯等を置いている材料コーナーがある。今回は、それとは別にカレー作りに必要な皿、綿、画用紙、型抜き画用紙をセットにし、テーブルの中央に置いた。そうすることで、子供たちはカレーを作るために必要なものがすぐに分かり、またすぐに手に取ることができたため、夢中になって作る姿へとつながったのではないかと考える。
- ②画用紙の幅を、子供がはさみで3、4回切り進めると切り落とすことのできる長さに整えておいた。そうすることで、どのように切ったらよいか分かりやすく、また自分にもできそうと前向きな気持ちになり、何度も画用紙を切ることを楽しんでいった。また、カレー作りに使う画用紙を用意する際には、子供たちに使いたい画用紙の色を尋ね、オレンジ・茶・赤の3色を提供した。そうすることで、「激辛カレーにしたいから赤色」「いつも食べてるカレーと同じ茶色」と、色からイメージを膨らませたり、自分の作りたいカレーのイメージに合った色を選んだりしていた。
- ③同じテーブルに、カレー作りセットとポテト作りセットを置いていたが、集まった子供たちは綿に興味をもって手に取り、そこから全員がカレーを作り始めた。そこで、ポテト作りセットを別の場所へ移動し、テーブルにはカレー作りセットのみを置いた。そうすることで、製作スペースが広くなり、1人に1つずつのカレー皿を並べて作ることができた。また、この場所が「カレー作りコーナー」であると分かりやすくなった。教師が「ここがカレー作りコーナーだよ」と周囲に知らせると、作ってみたいと思った子供たちがさらに集まった。コーナーへ来ると必要な材料が揃っていたこと、友達が作っている様々なカレーが並んでいたこと、目の前に実際に作っている友達の姿があったことで、すぐに自分でも作ってみようとする姿へとつながったのだと考える。
- ④子供たちが綿を手に取って揉んだり引っ張ったりちぎったりしている姿、何枚もの画用紙を細かく切っている姿から、この夢中になって作っている姿を大切にしたいと思い、コーナーに材料が途切れないように適宜補充した。その際に、子供たちがよりカレー作りのイメージに浸って楽しむことができるように、単に「綿を持って来たよ」と提供するのではなく、教師自身がカレー作りのイメージに浸って、綿をご飯、型抜き画用紙をにんじんやじゃがいも等と見立てて言葉で表現しながら材料を提供した。そうすることで、「お花の形のにんじんを入れたい」「この丸い形は黄色だからじゃがいもにしよう」「3色全部混ぜたスペシャル味にする」とさらにイメージを膨らませ、それを言葉にしたり作っているカレーで表したりする姿へとつながった。今回は、素材からイメ

ージを膨らませて作ることに對しての援助が主になり、子供たちが様々な素材そのものと触れ合っている姿を大切にす援助が不十分だった。子供たちの感じ方を受け止めること【A】、子供たちが感じていることを言語化してフィードバックすること【B・J】、教師も一緒に感触遊びを楽しむこと【A】、五感を刺激する働きかけ【C】、オノマトペで伝えること【B】等の援助を意識して行っていくことで、子供たちの感性にも働きかけていきたい。

- ⑤コーナーにある材料を使って、それぞれが自分なりのカレーを作っていた。それぞれの表現を認める声をかけたことで、「ミックススペシャルカレーだよ」「たくさんチョコキチョコキしたよ」と工夫したところを次々と言葉にしていた。教師に認めてもらったことで、自分の表現に自信をもつことができたのだと考える。また、「真っ赤な激辛カレーだ、うわ～辛い」と子供がもつイメージに合った声をかけたことで、「もっと赤色を入れて、もっともっと辛くする」と言いながら意欲的に作っていた。さらに「〇〇ちゃんは、画用紙を細かく切ったんだね」と教師が周りの友達にも聞こえるように話すことが、友達の作っている様子に注目するきっかけとなっていた。「すごいね」と友達に声をかけたり、自分でも真似てやってみたりする姿へとつながっていた。

(2) いらっしゃいませ、レストランへようこそ！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>ワゴンに並んでいるジュースやアイス、カレー等を、じっと見ている子供がいた。【もの】</p> 	<p>⑥そこで、その子の横に並んで一緒にワゴンを眺め、「おいしそうな料理がいっぱいだね、食べてみたいね」と声をかけた。【L：イメージを膨らませる声かけ】</p> <p>⑦レストランの場を作ることを提案し、「ここに机を運ぼう」「他には何がいるかな」と必要なものを考えられるような声をかけながら子供たちと一緒に場作りをした。【I：興味に合った遊びの提案】【E：イメージを膨らませる環境構成】</p>
<p>テーブルにクロスをかけたり、椅子を運んできたりして、レストランの準備をした。【もの、こと】</p>  <p>もっとたくさん椅子を運ばなくっちゃ！</p>	<p>⑧T2がお客さんとなって子供たちと一緒にワゴンへやって来た。T1は店員となり、T2とやりとりをして見せた。【H：やりとりのモデルを示す】</p>

子供たちも、次々に注文をしたり料理を受け取ったりして、お店屋さんごっこのやりとりを楽しんだ。【もの、人】

ポテトとミックスジュースをください。



料理を受け取ると、レストランのテーブルへとやって来た。みんなでテーブルを囲み、笑顔で料理を食べていた。【もの、人】

おいしいです！

「とってもおいしいです」「もっと食べたいです」と教師とのやりとりを楽しんだ。【人】

そして、お店で注文し料理を受け取る、レストランで食べる、食べたものを返却する、またお店で注文する、というように何度も繰り返し楽しんでいった。【もの、人、こと】

しばらくすると、これまで教師が店員として立っていた場所にやってきた子供がいた。そこに、客役の子供がやって来た。【人、こと】

子供たち同士で店員とお客さんになり、お店屋さんのやりとりをしていた。【もの、人、こと】

ポテトをどうぞ。

お金です。

ありがとうございました！



いらっしゃいませ、ご注文は何にしますか？

T 2

T 1

ジュースとアイスをください。

かしこまりました。はい、どうぞ。

⑨そこへ、店員になりきって「お客様、おいしいですか」などと声をかけた。【N：イメージを膨らませる声かけ】

お客様、お味はいかがですか？



次はジュースが飲みたいな。

⑩そこで、教師は店員役から一歩引き、近くから様子を見守った。【E：子供同士のやりとりを生む環境構成】

(子供たち同士でのやりとりが生まれそう…)



お店屋さんにお客さんが集まっている様子を見て、自分が作ったジュースを持ってやって来た子がいた。工夫したところを話しながら教師にジュースを見せた。【もの、人、こと】

私もジュースを作ったよ。黄色と紫を入れたの。甘くて酸っぱいんだよ～。



作ったジュースを笑顔でお店のワゴンに並べ、再びジュースを作りに行っていた。【もの、人】

⑩そこで、ジュースを受け取って飲み、感想を伝えた。【J：幼児の工夫したところを受容する声かけ】



甘いのと酸っぱいのが入っていて、とってもおいしい！

教師の振り返り

- ⑥ワゴンをじっと見ていた子供は、以前お店屋さんの遊びをした際に、お客さんになって料理を食べることを楽しんでいたことがあった子供だった。そこで、今日もお客さんになって遊びたいのではないかと予想し、声をかけた。
- ⑦この時には、多くの子がカレー作りに夢中になっていて、店員役になりたい子供はいない様子だった。お店屋さんの遊びが成立しそうなタイミングはまだ先だと捉えた。お客さんになりたい子供の思いを、お店屋さんの遊びが始まるまで継続したいと考え、レストランの場作りを一緒にすることを提案した。そして、「この前は机にクロスをかけたね」と以前の遊びを思い出すことができるような声をかけたり、「何人で食べようかな」と必要な椅子の数を考えたりできるような声をかけたりすることで、子供たちが自分で必要なものを考えて意欲的に場作りをすることができるように援助した。
- ⑧レストランの場は整ったが、多くの子供たちはまだカレー作りに夢中だった。しかし、レストランを準備した子供たちは、お客さんとなって早くレストランごっこを始めた様子だった。そこで、T1が店員となり、子供たちと一緒にやって来たT2と共に、注文時の会話をしたり物のやりとりをしたりして、店員とお客さんとのやりとりのモデルを示した。その様子を見たことが、子供たちの「3人います」「いちごアイスをください」とすぐにお客さんになりきってやりとりを楽しむ姿につながったのだと考える。
- ⑨自分たちで場を整えたレストランで、友達とテーブルを囲んで料理を食べることを楽しんでいた。さらにお店屋さん・レストランのイメージに浸って遊んでほしいと思い、店員になりきって「お客様、お味はいかがですか」と声をかけた。すると、子供たちもお客さんになりきって「とってもおいしいです」「次はジュースが飲みたいな」と答えていた。会話の流れから「またお店に買いに行こう」と遊びが展開していった。教師がやりとりのモデルを示したことで、子供たちがお店で料理を注文して買う、レストランで食べる、食べたものを返却し再びお店で注文する、ということを繰り返し楽しむ姿につながったと考える。
- ⑩遊びの流れができてきたタイミングで、これまで教師が立っていたワゴンの店員役側

にやってきた子供がいた。お客さん役の子供と向き合う形になったのを見て、子供たち同士でお店屋さんごっこのやりとりが生まれそうだと思います、教師はそっと一歩後ろに下がってその様子を見守った。これまでに、T1とT2のやりとりのモデルを見たことや、自分がお客さんとなり店員役のT1と何度もやりとりをしたこと、料理やお金等のお店屋さんのやりとりに必要なグッズが揃っていたこと、ワゴンが間にあることで店員とお客さんの役が分かりやすかったこと等から、自然とやりとりが生まれたのではないかと考える。

- ⑩自分の作ったジュースを大切に抱え、教師に見せに来た。その子供の言葉を受け止め、「こっちの黄色は…酸っぱいね。紫は…甘いね」と、子供の表現したことを教師も言語化して伝えた。そして「おいしい！いろいろな味が入っていてとってもおいしいね」と声をかけると笑顔になった。自分の作ったジュースを教師に認めてもらったことが自信となり、そのジュースをお店のワゴンに並べる姿、さらにジュース作りをする姿につながったと考える。

3 考察

この時期の子供たちは、身の回りの様々なものに興味をもち関わろうとする。この日は、カレー作り、ジュース作り、ポテト作り等、それぞれに必要な材料をセットにしておいた。(①) また、それらのセットをテーブルを分けて設置することでコーナー分けをしたり、遊びの様子に応じて環境の再構成を行ったりした。(③) そうすることで、夢中になってカレーやジュースを作る姿が多く見られた。ゆえに、イメージを膨らませながら作る姿や、自分なりに工夫して作る姿を引き出すには、このような環境構成(①)(③)が有効であったと考える。

一方で、子供たちの「作る姿」への援助が主になり、素材そのものの感触や特徴を味わうことに対する援助が不十分だった。今回、カレー作りに多くの子供たちが集まった大きなきっかけは、新たな素材である「綿」を提供したことであった。子供たちは、綿という素材に興味をもち、次々と手に取っていた。そして「ふわふわだ」「もふもふ～」「引っ張るとちぎれたよ」と感じたことや気付いたことを話していた。これらの姿を大切に、素材そのものを十分に弄んだり、五感で味わったりするための援助【A・C】があれば、より子供たちのイメージが膨らんだり、感性が働いたりしていたかもしれない。今回、②の場面では、綿を手にした子供たちに、次にカレー作りに必要になるであろう画用紙を提供することを優先してしまっただが、綿を弄ぶことを楽しんでいる子供たちの姿があったことから、素材そのものと同じく向き合う機会も大切にしていきたい。

今回、アイス作りセットも用意し、教師が実際にモデルを示しながら作り方(新聞紙を丸める、その上にお花紙を巻きテープで留める、カップに入れる、ペンや型抜き画用紙で装飾する)を提案したが、この遊びはあまり子供たちには普及しなかった。作る工程が多いことや、お花紙を破れないように巻くこと等が、子供たちにとっては難易度が高いと感じたようだった。しかし、以前にハンバーガーのバンズ作り(新聞紙を丸める、その上にクラフト紙を巻きテープで留める)の遊びを提案した時には、難易度がほぼ同等であったにも関わらず、多くの子供たちが作っていた。ハンバーガーは、バンズを作ることに難しさを感じたものの、その後に「好きな具材(様々な形や色の画用紙)を挟む」ことができるところが魅力的で、それが作ってみる意欲につながったのだと考察する。子供たちが「ちょっと難しいけれど、やってみたい」と思えるように、作ったものを活用した遊びや遊びの展開を提案する援助【I・N】も、子供たちの表現する意欲を引き出すのに効果的であると考えられる。

■援助の事例表 3歳児（9～11月）

1 「感性」に関わる教師の援助のカテゴリと事例

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
A 感じたことに共感する	幼児の感じたことに共感する声かけ	ヤクルト鉄砲が飛ぶ様子に驚いている幼児に「容器が飛び出したね、すごいね」と声をかける。
		「爆弾みたいないも」「くっついた仲良しいも」と子供が感じたことを言葉にしているのを受け止め、共感する。(いもほり)
	幼児のイメージに共感する声かけ	いもスタンプを押して「誰かが食べた形になった」「へびみたい」と、子供が感じたことを言葉にしているのを受け止め、共感する。
		イメージをつぶやきながらお面を作っている幼児に「青いワニ、素敵だね」「カラフルねこ、可愛いね」と声をかける。
B オノマトペで伝える	工程をオノマトペで伝える	作った羽を身に着けて披露する子供たちに「きれいだね」「ちょうちょうが飛んでいるみたいだね」と声をかける。
		いももちの作り方を「もみもみするよ」「ころころ丸めるよ」などと、オノマトペと実演で伝える。
C 五感を刺激する働きかけ	五感を通して素材の特徴に気付いたり感じたりできるような声かけ	五感を働かせていもほりを楽しむことができるように、「匂い」「形」等の視点を意識した声をかける。
		どんぐりを探し始める前に「お気に入りのどんぐりは見つかるかな」「どんな形かな、大きいかな小さいかな、触ったらどんな感じがするかな」と声をかける。
D 特性を伝える	素材の特徴に気付くことができるような声かけ	作った羽を身に着けて披露する子供たちに「テープがひらひら揺れているね」「テープをたくさん貼ったから光って見えるね」と声をかける。
	自然物の特徴に気付くことができるような声かけ	見つけたお気に入りのどんぐりを教師に紹介する子供たちに、「本当だ、つるつるだね」「帽子付きだね」と特徴を言葉にして伝える。
	素材の特徴に気付くことができるような素材の提示	きらきらテープが光って見えるように、揺らして見せながら提供する。
		すずらんテープを揺らしながら「ひらひらしてるよ」と見せ、特徴を知らせる。
		はらぺこあおむしの触覚を作るときに、簡単に曲げて形を変えることができるというモールの特徴を見せながら伝える。

2 「表現」に関わる教師の援助

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
E 環境の構成	道具を使うことのできる環境の構成	製作コーナーにはさみを常設し、自由に使うことができるようにする。 すぐにバーベキューごっこを始められるように、目に付きやすい場所に、必要な道具や材料を並べ、場を整えておく。
	素材を使うことのできる環境の構成	製作コーナーのはさみ置き場の隣に、すずらんテープを設置する。
	道具や素材を使うことのできる環境の構成	テーブルやワゴンを並べ、その上にポテトやハンバーガー、ジュースを作るのに必要な材料を用意して「お店屋さんコーナー」を設置する。
F 素材、材料、道具の提供	幼児のイメージを膨らませる素材の提供	製作コーナーに、空き箱や芯、カップ等の使い慣れた素材を十分な量用意しておく。
	幼児の意図に合う素材と道具の提供	的作りに必要な画用紙、ペン、ボード等を用意する。
	幼児が扱いやすいように工夫した材料の提供	子供が扱いやすい大きさにして新聞紙を提供する。 ポテト作りの材料として、扱いやすい大きさに切った画用紙を提供する。
G 素材、材料、道具の提案	幼児の興味に合った材料、道具の提案	運動会であおむしに変身して運動遊びをすることを楽しんだ子供たちに、お面作りの材料（動物の塗り絵、紙用マッキー、お面ベルト）を材料コーナーに置き、提案する。
H 見本・モデルの提示	幼児の表現したいものを実現するための見本の提示	的当てに必要な的作りをみんなで楽しむことができるように数字の見本をかく。 新聞紙ボールの作り方を、丸める、セロハンテープで留める、好きな色のビニルテープを巻く、と一工程ずつ伝える。
	幼児の表現したいものを一緒に作る取組	的当てに必要な的作りをみんなで楽しむことができるようにボードに画用紙を貼る手助けをする。 一工程ずつハンバーガーやポテトの作り方を伝えながら教師も一緒に作る。
	道具や素材の扱い方の提示	ペーパー芯にはさみで切り込みを入れて作るタコの作り方を、その場で実際に作りながら伝える。
	素材の扱い方を提示	はらぺこあおむしの触覚を作るときに、簡単に曲げて形を変えることができるというモールの特徴を伝え、実際にやって見せる。
	幼児と同じイメージに浸り一緒に遊ぶ取組	網の上に食べ物に見立てた葉っぱを並べたり、それを裏返したりして、教師も一緒にバーベキューごっこをする。

I 遊びの提案	幼児の作品を活かす遊びの提案	ヤクルト鉄砲を使った的当て遊びを提案する。 ある程度の数のポテトやハンバーガー、ジュースが出来上がったタイミングで、店屋の遊びができるようにお客さんが座ることのできる場を整える。
	幼児の興味に合った遊びの提案	「箱に貼って、持ち手にすることもできるよ」とすずらんテープの使い方を具体的に提案する。 新聞紙ボールを使った、玉入れやシュート遊びを提案する。
	幼児の意図に合う作品作りの提案	「ボールを投げたい」と言った幼児に新聞紙ボールを作ることを提案し、実際に新聞紙を丸めて見せる。
	幼児のイメージに合う作品作りの提案	画用紙や折り紙等の素材そのものを食べ物に見立てて遊んでいる幼児たちに、ポテト作りとポテトの袋作りを提案する。
J 表現を受容する	幼児の工夫したところを受容する声かけ	「すずらんテープの持ち手、素敵だね」と、子供が工夫して作ったところを認める声をかける。 「長〜いポテトだから、食べても食べてもまだまだあるね」「太いポテトは、熱々でおいしいよ」と、子供が表現したイメージを認める声をかける。
	L イメージを膨らませる	幼児のイメージを膨らませる声かけ バーベキューごっこをしながら「何を使ってお肉を裏返そうかな」と遊びに必要なものを思い出したり考えたりすることができるような声をかける。
N 物語化	幼児のイメージを膨らませる声かけ	「〇〇ちゃんあおむしに変身」と一人一人に声をかけてお面を付ける。 「〇〇でござるか」「演奏するワン」と、子供たちの役のイメージに合った話し方で接する。
	幼児と同じイメージに浸り一緒に遊ぶ取組	教師もお面を身に着けて「ガオー」「お腹が減ったガオー」となりきって一緒に遊ぶ。 バーベキューごっこをしている子供たちに、「いい匂いがしてきたね」「(手を網に近付けて温度を確かめる仕草をしながら) そろそろ焼けたかな」と声をかける。
P 周囲に広める	作品について説明する場の設定	ヤクルト鉄砲の作り方や飛ばし方を、教師や友達に説明する場を作る。
	作品の作り方や扱い方を共有する場の設定	的当てに必要な道具や遊び方を、友達に紹介する場を作る。
	幼児がしている素材の扱い方の拡散	幼児のきらきらテープの貼り方を「ばらばらに貼っているね」「形を作って貼っているのかな」と言葉にしてクラス全体に知らせる。
	友達の表現に興味をもつための声かけ	「〇〇ちゃんの青いワニ、かっこいいね」「〇〇くんはネコになっているんだね」と言って、友達がお面を作っている様子やそれを使って遊んでいる様子を周りの子供たちに知らせる。 「ナイスシュート!」「〇〇君の作ったオレンジボールが転がっています」と、周りの子供たちにも聞こえるように声をかける。

◇事例2 キャンプごっこ 4歳児（10月）

1 これまでの子供の姿と遊びの経緯

本園では、研究一年次に4歳児4～10月に見られる表現する子供の姿を「イメージに向かって、様々な素材や方法を自分なりに取り入れながら遊ぶ」と捉えた。この姿を期待し、保育の中で援助を続けてきた。ここでは、10月の「キャンプごっこ」の事例から教師の援助を紹介する。

4歳児ばら組の子供たちは、9月に入り、数人の子供たちでごっこ遊びのイメージをもって遊ぶようになっていた。バーベキューごっこの遊びでは、木の葉や実を食べ物に見立てて網に乗せ、トングで裏返したり、食べる真似をしたりすることを楽しんでいた。遊び進めるうちにキャンプのイメージをもって遊ぶようになり、寝る場所を模索する中で、自分たちでテントを作るようになった。大型段ボールを組み合わせ、自分たちが入ることのできる大きさのテントを作り、中に入って遊ぶことを繰り返していた。そして、屋根の必要性に気付いた子供たちが、水色と黒色のカラーポリ袋でテントに屋根を付けた。それを見た他の子供たちが「他の色も使ってカラフルな屋根を作りたい」「いいね、虹みたいにしよう」と話し合っていた。

2 保育の実際

(1) カラフル屋根のテントを作ろう！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名p.11 参照
<p>カラーポリ袋を見つけた子供が「屋根」と言いながら5色のカラーポリ袋を全てテントに持って来た。カラーポリ袋を手に持ったまま、テントの中に入ったり出たりすることを繰り返していた。 もの、 こと</p> 	<p>①前日の「他の色も使ってカラフルな屋根を作りたい」という子供の発言を受け、<u>5色（赤、ピンク、黄、黄緑、オレンジ）のカラーポリ袋を用意し、製作コーナーに置いておいた。</u>【F：幼児のイメージに合った素材の準備】</p> <p>②子供たちの様子を見て、「<u>屋根を付ける方法は2つあるよ。一つ目は、カラーポリ袋を全部つなげてからテントにくっつける方法だよ。二つ目は、1枚ずつテントの上に乗せて貼る方法だよ</u>」と2通りの方法を伝えた。</p> <p>【G：幼児の表現したいものを実現するための方法の提案】 1枚ずつ屋根に貼るのは、こういうことだよ。</p> 

カラーポリ袋がカラフルな屋根のようになった様子を見た子供たちは笑顔でテントの中に入った。その時、偶然風が吹いてカラーポリ袋が飛んで行った。子供たちは、「きゃ〜！」と顔を見合わせて笑っていた。 **こと** **人**

教師の言葉を聞いた子供たちは、屋根を「くっ付けたい」と言ってガムテープを持ってきた。 **もの**

教師からガムテープをもらって屋根とテントを接着した。 **もの**



屋根の貼り方を説明しながら、テントの上にカラーポリ袋を乗せて見せた。【O：幼児のイメージの視覚化】

③教師が「やっぱり屋根をくっ付けないと飛んで行っちゃうね」と声をかけた。【I：幼児の意図に合う作品作りの提案】

④教師がガムテープを次々にちぎって子供たちに渡した。【F：幼児が扱いやすいように工夫した材料の提供】

⑤T1は、同じキャンプごっこの遊びの1つであるバーベキューごっこの様子を見てくことを伝え、ガムテープを切って子供に渡す役割をT2と交替して、テント作りの場を離れた。そして、バーベキューコーナーにいる子供にテント作りの様子を伝えた。
【N：ごっこ遊びのイメージに合わせた声かけ】
【M：イメージをつなぐ声かけ】

バーベキューコーナーのお肉が焼けたか見てくるから、テントの完成は頼んだよ。



カラフルな屋根のテントがもうすぐ完成しそうだよ、早くテントに入りたいね。



教師の振り返り

- ①前日に子供たちが「カラフルな屋根にしたい」と言った際に、具体的な色を尋ねた。前日のうちに、子供たちが求めた色を製作コーナーに置いておくことを伝えていたので、子供たちはすぐにカラーポリ袋を取りに行ったのだと考えられる。
- ②子供たちが「屋根！」と言いつつもなかなか屋根を付け始めない様子を見て、屋根を付けたい気持ちはあるものの付け方が分からないのではないかと推察した。つまり、「屋根を付ける」には、「カラーポリ袋を広げる」「自分たちの身長より高いところにカラーポリ袋を乗せる」という段階を踏む必要があることが難しいようだった。そこで、付け方を2通り提案し、屋根を付けるきっかけをつくった。さらに、言葉だけでは屋根の付け方が十分に伝わりきってないようだったので、実際にテントの上にカラーポリ袋を乗せて仕上がりイメージをもてるようにした。すると子供たちは、カラフルな屋根に喜び、中に入って嬉しそうにしていた。これらのことから、「屋根を付ける」という一から自分たちの力で実行することは難しいことがあっても、そこに教師が具体的な方法を提案したり見せたりしたことで、どのような屋根になるのかが分かり、テントの中に入ってみることに繋がったと考えられる。
- ③子供たちに屋根を接着させる必要性を伝えようと「屋根をくっつけないと飛んじゃうね」と声をかけた。一方で、屋根が飛んだ際に、子供が感じているハプニングの面白さに共感して、子供たちが自ら接着の必要性に気付くことができるように「なんで飛んじゃったんだろうね」と声をかけていれば、子供たちが自ら考えるきっかけを与えられたのではないかと考えられる。
- ④屋根を付けたい気持ちが高まっている子供たちの様子を見て、教師は屋根を自分たちの力で完成させることを願った。これまでの経験からガムテープを自分で切ることは難しい様子であったため、教師がガムテープを切り、子供に手渡すことにした。そうすることで、自分たちの好きな場所にガムテープを貼り、作り上げる喜びを感じると共に自分たちで作ったテントへの愛着が増すのではないかと考えた。このように、子供が扱いやすいように材料を工夫して提供することで、子供が製作するときのハードルを下げ、モチベーションを保ちながら製作し、完成させることに繋がったと考えられる。
- ⑤同じキャンプごっこの遊びだが、バーベキューごっことテント作りは遊びの場が離れており、イメージをつなげる必要性を感じていた。そこで、テント作りの子供たちにバーベキューの話題を出しながら、T 2と役割を交替することにした。また、バーベキューコーナーに行った際には「カラフルな屋根のテントができてきているよ、早くテントに入りたいね」と、テント作りの経過を伝えた。そのことにより、テント作りとバーベキューごっこをしている子供たちが、互いの様子を気にしながら同じキャンプごっこのイメージで遊ぶことに繋がったと考えられる。さらに、その時に「バーベキューコーナーを見てくるね」ではなく、「お肉が焼けたか」という子供の遊びのイメージに合う言葉を使って声をかけることで、キャンプごっこで遊んでいるイメージを膨らませながら遊ぶことにも繋がったと考えられる。

(2) カラフル屋根のテントの中で遊ぼう

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>テントの屋根が完成すると、すぐにテントの中に入り、屋根を見上げた。そして、中から見て気付いたことや様子を話した。【こと】</p> <p>電気がオレンジ色に見えるよ。</p>  <p>顔を屋根に近付けると見えるんだよ。</p> 	<p>⑥子供のつぶやきをテントの外側から聞き、テント内を覗きながら見え方の違いを伝えた。【D：素材の特性に気付くことができるような声かけ】</p> <p>そうなの？屋根の上からはみんなのことが見えないよ。</p> <p>⑦顔を屋根に近付けたり、テントの中に入って上を見上げたりして、子供が気付いたことを教師も真似て受け止めた。【A：幼児の感じたことへの共感】</p> 
<p>子供たちは笑顔になり、その後も気付いたことを話したり、友達とテント内をあちこち移動しながら遊んだりしていた。【人】</p> <p>教師の提案を聞き、「そうしよう！」と園庭にテントを運び始めた。【こと】</p> 	<p>⑧子供たちがテント内でしばらく遊んだ頃を見計らって「テントをバーベキューコーナーに運ぼう」と提案した。【M：イメージをつなぐ声かけ】【I：幼児の作品を活かす遊びの提案】</p> <p>⑨教師も一緒にテントを運んだ。【P：周りに広める】</p>

園庭のバーベキューコーナーにテントを運び終えた子供たちが、テントの中に入って、気付いたことを話したり、教師や友達と一緒に遊んだりした。

こと、人



遊園地みたい!

遊園地の部屋を私たちの部屋にしようよ。

いいね。

⑩教師も一緒にテントの中に入り、どんな感じがするかを尋ね、子供の気付きを受け止めた。【C：五感を刺激する声かけ】 【A：幼児の感じたことへの共感】

どんな感じがする?

遊園地にいるみたいにわくわくするもんね!

⑪また、教師自ら気付いたことを伝えた。【B：オノマトペを使った声かけ】

(風が吹いたことで屋根が風になびいて膨らんだ時に) 屋根がふわふわ膨らんでいるよ。

教師の言葉を聞いて、頷いていた。人

本当だね、温かいね。



テントの中ってほかほかして暖かいね。

⑫その後、テント内で寝たり、食べたりする際にキャンプをイメージした声をかけた。

【M：イメージとの結び付け】 【N：イメージに合わせた声かけ】

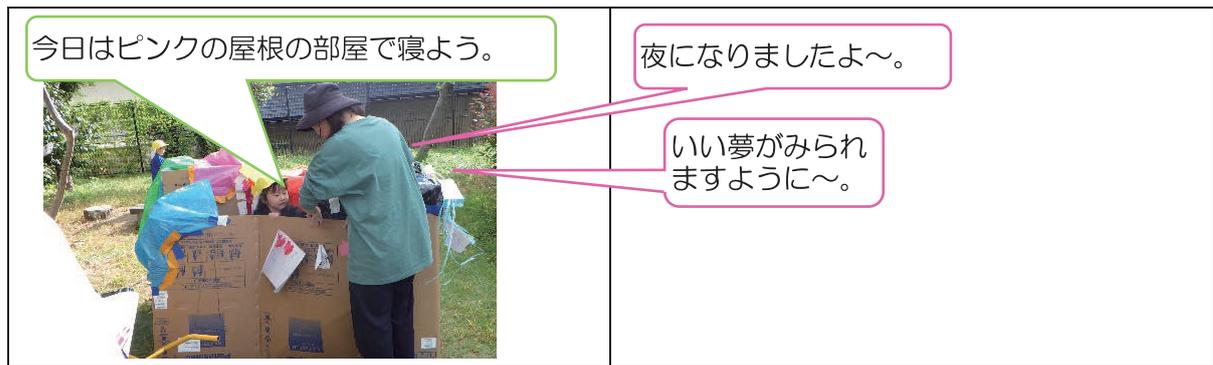
お肉が焼けましたよ。

お腹が空いたな～。



(肉に見立てた葉を裏返して) いい焼き具合ですよ。

お肉が焦げてないか確かめてね。



教師の振り返り

- ⑥テントの内側と外側からの見え方の違いに面白さや不思議さを感じてほしいと思い、教師側（外側）からの見え方を伝えた。そのことが「顔を近づけたら見えるんだよ」という子供の新たな気づきを生み出すきっかけとなった。その後も「水色の屋根は、電気が白色に見えるよ」と、気付いたことを次々に話していた。テントの外側にいた教師と子供たちと見え方の違いを伝えたことが、素材や光の性質に気付くきっかけとなったと考える。
- ⑦子供の気づきを「そうだね」と言葉で認めるだけでなく、教師も一緒に体験し子供の気づきを同じ目線で感じてから共感することを心がけた。そのことにより、子供の気づきに深く共感でき、子供が自信をもって自分なりの気づきを伝えることにつながるのではないかと考えたからである。
- ⑧「テントを外に運ぼう」と提案したのは、連日バーベキューごっこをしている園庭の森にテントを運ぶことを繰り返していたので、キャンプごっこを同じ場で一緒に楽しむことができるのではないかと考えたからである。それまでにバーベキューコーナーのことをテント作りをしている子供に伝えていたこともあり、子供たちは教師の提案にすぐに賛同してテントを運ぶことにつながったと考える。
- ⑨保育後のカンファレンスで、カラフルな屋根のテントを運ぶ際に、バーベキューコーナーで遊んでいた子供たちに「素敵なテントが出来上がったよ、一緒に運ぼう」などと声をかけていれば、テント作りをしていた子供たちとバーベキューコーナーで遊んでいた子供たちがつながり、一緒に力を合わせてテントを運ぶことができたのではないかという意見が出た。同じ「キャンプごっこ」の遊びであるが「バーベキューごっこ」と「テント作り」は遊ぶ場が違っていたため、教師がイメージをつなぐ声かけをしてきた。それだけでなく、「一緒に運ぶ」という行動を共にすることが「一緒に遊んでいる仲間」という意識を高めることになったと考える。さらに、その際にテント作りの頑張り伝えることで、感謝の気持ちやテントを大切に使う気持ちをもつことにつながると考える。
- ⑩子供たちがテントの中に入って遊び始めたタイミングで、室内でテントの遊びをしていた時とは違い、風や太陽光の影響を受けることで新たな気づきがあると思い、子供たちにどのような感じがするかを尋ねた。その結果、子供の気づきを促すことにつながったと考える。
- ⑪教師自ら気付いたことを積極的に言葉で伝えるようにした。その際、オノマトペを使うことで教師の伝えたいことが分かりやすくなるのではないかと考え、オノマトペの表現を様々に用いて伝えた。
- ⑫キャンプのイメージに浸って遊ぶことを存分に楽しむことができるように、テントとバーベキューを行き来しながらイメージを膨らませる声かけをした。その結果、「お肉が焼けましたよ」「今日はピンクの部屋で寝よう」など、イメージを膨らませながら遊ぶ姿を引き出すことができたと考える。

3 考察

テント作りをしている子供たちは、カラフルなカラーポリ袋と出会い、その透過性やビニールならではのカシャカシャした音等、素材（カラーポリ袋）と自然（光や風）が合わさることで素材の不思議さや面白さに気付きながら遊んでいた。教師は、子供たちの気付きを促す言葉（⑥、⑪）や気付いたことを認める声かけ（⑦）ビニールを行うと共に、自ら遊びに加わり、気付いたことをオノマトペを用いながら積極的に伝えること（⑩）も行った。そのことにより、子供たちは新たな視点を持ち、素材に触れながら遊ぶことを楽しむことができたと考える。一方で、③の場面では、教師が屋根をテープで付ける必要があることを直接伝えたことで、子供たちの気付きが狭まった可能性がある。以上のことから、子供たちの気付きを促すためには、子供の気付きを引き出すような声かけや気付きを認める声かけが大事である。教師の声かけ一つで子供の思考や気付きに大きく影響を与えるという今回の学びを生かし、これからはより一層一つ一つの言葉を意識していきたい。

また、キャンプごっこには、バーベキューごっこ（園庭）とテント作り（室内）の2つがあり、場を分けて遊んでいた。そこで、教師は子供たちをつなぐ言葉かけを意識的に行った。（⑤）しかし、言葉だけでなく、⑨の場面では一緒に運ぶという共同作業をすることで、友達の作ったものに興味をもつことや仲間意識をもつことにつながる可能性があるということを学んだ。この日だけでなく、これまでも、イメージをつなぐ援助、子供たちをつなぐ援助を積み重ねてきた。それが、クラスの子供たちが誘い合いながら友達と一緒に遊ぶ姿につながっていると考えられる。子供のイメージをつなぐ援助を声かけ以外にも模索し、イメージをつなげながら一緒に遊ぶ楽しさを存分に味わうことができるように支えていきたい。

さらに、子供たちのイメージを膨らませるためには、⑤や⑫のようにイメージに浸った声かけが有効であることが分かった。今後も子供たちの遊びのイメージに教師も浸りながらイメージに合う声かけをしていきたい。

■援助の事例表 4歳児（8～10月）

1 「感性」に関わる教師の援助のカテゴリと事例

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
A 感じたことに共感する	幼児の感じたことに共感する声かけ	サツマイモの匂いを嗅ぎ「土の匂いだ」と言った幼児に、「本当だね、土の中にずっといたからなのかな」と言う。
		水色と黒色のカラーポリ袋で作った屋根の下から上を見ると「電気が違う色に見える」と言った幼児に、「本当だね」と言う。
		幼児がラカンジュを触り「ぶにぶにだね」と言った際に、ラカンジュを触り「本当だね、気持ちいいね」と言う。
		輪ゴムをはじくと音が鳴ることに気付いた幼児に、「きれいな音だね」と声かける。
B オノマトペで伝える	感触をオノマトペでの伝達	石鹸でできた泡を触り、感触を「ふわふわ」という言葉で伝える。
	様子をオノマトペでの伝達	テントにつけたカラーポリ袋製の屋根が、風になびいて膨らんだ時に、「屋根がふわふわ膨らんでいるよ」と言う。
C 五感を刺激する働きかけ	五感を通して素材の特徴に気付くことができるような視点の声かけ	五感を通してニンジンの種の観察をすることができるように、「どんな匂いがする？」「何の形に似ているかな」など、具体的な視点を伝える。
		五感を通してサツマイモの観察をすることができるように、「どんな匂いがする？」「触って見たらどんな感じかな」など、具体的な視点を伝える。
	五感を通して素材の特徴に気付くことができるような声かけ	固いラカンジュをカップに入れた時に「いい音がするよ」と言う。
	楽器の音色に注目させる働きかけ	音色の違いに気付くことができるように、複数の楽器を順に鳴らす。
	音の特徴に気付かせる働きかけ	音の違いに気付くことができるように木の実や葉を1つずつカップに入れ、音を聞かせる。
D 特性を伝える	素材の特性に気付くことができるように素材の様子の手提示	これまで扱ってきた絵の具との濃度の違いに気付くことができるように、絵の具を筆から垂らして見せる。
	素材の特徴を比較しながら周りの幼児に伝達	砂場でプール遊びと砂風呂遊びをしている幼児と一緒に裸足になって、「砂の中って水の中と違って温かいね」「砂の中に足を入れると、ぎゅっと包まれているみたいね」と、砂の温かみや感触を水と比較しながら周りの幼児に伝わるように言う。

2 「表現」に関わる教師の援助

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
E 環境の構成	幼児のイメージに合う素材の準備	お化け屋敷に付けるカーテンの材料として5色の不織布を用意しておく。
		テントの屋根を作る素材として5色のカラーポリ袋を用意しておく。
		幼児がプラスチックカップで作ったマラカスを装飾するために、10色の油性マジックやビニルテープを用意しておく。
F 素材、材料、道具の提供	幼児のイメージに合う素材の提示	新聞紙のボールに貼るために、5色のガムテープを提示する。
G 素材、材料、道具の提案	幼児の意図に合う素材の提案	「家の壁を倒れないようにしたい」という子供の意図に合う素材として段ボールを提案する。
		サッカーボールを作るための素材として新聞紙を提案する。
H 見本・モデルの提示	表現しようとする意欲を引き出すための働きかけ	音楽をかけて、マラカスを鳴らしながら率先して踊る。
	作品の様々な使い方を周りに広めるために一緒に遊ぶ	幼児と一緒にペーパー芯を使った飛ぶおもちゃで遊ぶ。
I 遊びの提案	幼児の興味に合った製作の提案	「おばけを作りたい」という幼児に、「ちょうちんおばけ」を製作することを提案する。
	幼児のイメージを活かす遊びの提案	ペットボトルをロケットに見立てている幼児に、「ロケットの発射準備をお願いします!」と言う。
	幼児の興味に合わせた遊びの設定	音や演奏に興味をもっている子供たちに、楽器遊びの時間を設定する。
J 表現を受容する	幼児の表現を受容する声かけ	お化け屋敷に黒いカーテンを付けた幼児に対して、「(おばけ屋敷が) 暗くなったね」と言う。
		幼児の製作したおばけを見て「怖い」と言う。
		幼児が作った料理や色水ジュースを食べる真似をして「おいしいね」と言う。
		ペットボトルをロケットに見立てた幼児のイメージを受け入れて「なるほど、上に飛ぶからロケットなんだね」と言う。
		ペーパー芯を使った飛ぶおもちゃの様々な使い方(おばけの的当てや打ち上げ花火)を「おもしろいね」と認める。
K イメージを引き出す	イメージをもつための声かけ	幼児が作った音が鳴る作品に「ギターみたいに見えるね」と言う。
		絵の具が垂れる様子や幼児のつぶやきから「溶けているチーズみたいだね」と声をかける。
		砂場のプールにペットボトルが浮かんでいる様子を「船みたい」と言う。

L イメージを膨らませる	表現しようとする意欲を引き出す声かけ	サッカー選手になりきっている幼児に、遊びに使うためのボールやサッカーゴールはあるのかを尋ねる。
	表現しようとする意欲を引き出す声かけ	音楽に合わせてマラカスを鳴らすことを「演奏会」と名付ける。
M イメージをつなぐ	イメージをつなぐ声かけ	室内でテント作りをしている幼児に「お腹が空いたら園庭のバーベキューコーナーにおいで」と声をかける。
N 物語化	幼児のイメージに合わせた声かけ	テレビを作った幼児に「今日は何のテレビが入っているかな」と言ってスイッチを押す真似をする。 キャンプごっこで「雷さまだぞ」と言った子供のつぶやきを拾って「大変、へそが取られちゃう」と言う。 テントに隠れている子供に聞こえるように「あれ？誰もいないのかな」とつぶやく。
	イメージを広げながら、表現しようとする意欲を引き出す声かけ	砂に埋まった船（ペットボトル）を助けるために「レスキュー隊の出動をお願いします」と声をかける。
O 視覚化	幼児の気付きの視覚化	テント作りに使う素材を決める際に、幼児が「新聞紙は破れやすい」「段ボールは硬くて壊れにくい」と言ったことをクラスの子供たちに共有できるようにボードに書く。
	幼児のイメージしたものの視覚化	テントの屋根を段ボールにしたいと言った幼児に対して、「どうなるかやってみよう」と言って段ボールをテントの上に乗せる。
P 周囲に広める	物の性質に気付いた幼児の気付きを友達に伝えるようにする声かけ	樋に流す水の勢いを変えると、樋の上に置いていたペットボトルの流れるスピードが変わることに気付いた幼児に、「え？そうなの？大発見だね！」と、周りにいる友達の注目を集めるように言う。

◇事例4 いろいろけえきやさん 4歳児（12月）

1 これまでの子供の姿と遊びの経緯

本園では、研究一年次に4歳児11～3月に見られる表現する子供の姿を「自分の思いやイメージを気の合う友達と、様々な方法で伝え合いながら遊ぶ」と捉え、この姿を期待し、保育の中で援助を続けてきた。ここでは、12月の「いろいろけえきやさん」の事例から教師の援助を紹介する。

4歳児さくら組の子供たちは、春や夏には、園庭にある草花や木の実を使ったジュースやケーキ作りをしており、継続して楽しむ姿が見られた。秋になって紅葉したモミジやイチョウの葉、ザクロの実が園庭にたくさん落ちると、それらに興味をもつ姿が見られた。これまでは自分のジュースやケーキを作ることに満足し、できたものを教師に見せていた。これらの遊びを続ける中で、友達のケーキを真似て作ったり、作り方を聞いたりと少しずつ友達の作ったジュース、ケーキや友達の使っている材料、道具に興味を示す様子が見られた。そうして、それぞれの子供が作ったケーキがどんどん増えてきた。作ったケーキを保育室横の保管棚に置いたことで、次の日にもケーキ作りをスムーズに続けることができた。今日の遊びについて話す「お話タイム」で作ったケーキを紹介すると、クラスの友達が「素敵だね」「食べてみたいな」と言ってくれた。そのことからケーキを作った子供たちの「お店屋さんを開きたい」という気持ちが高まり、ケーキ作りと並行して看板作りやケーキを並べる場作りも行いながら遊びを進めてきた。

2 保育の実際

(1) 面白い実があった！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>前日の強い風で園庭にはたくさんの葉が落ちており、興味をもった子供たちが集まった。落ち葉の上に座ったり、葉を集めて上から降らせたりして、友達と一緒にその様子を楽しんでいた。 もの、 人、 こと</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="256 1458 523 1518" style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 150px;">赤色の絨毯みたい。</div> <div data-bbox="555 1458 821 1518" style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 150px;">見て見て、ぱらぱらしたらきれいだよ。</div> </div>  <div data-bbox="304 1742 491 1809" style="border: 1px solid green; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 120px;">みんなで上に投げようよ。</div> <div data-bbox="853 1709 1204 1776" style="border: 1px solid pink; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 180px;">本当だ、（絨毯に）座ってみたらふわふわだね。</div> <div data-bbox="853 1809 1189 1877" style="border: 1px solid pink; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 180px;">いいね！やってみよう。3・2・1。きれい！</div>	<p>① 「赤色の絨毯みたい」「みんなでせーので投げたらきつときれいだよ」の言葉を<u>受け止めながら</u>、周りにいる友達にも知らせたり、一緒にやってみたりした。【A：感じたことに共感する】【B：オノマトペで伝える】【P：周りの友達に知らせながら一緒に遊ぶ】</p>

<p>ユズリハの実を見付け、集めた。【もの】</p> <p>たくさん落ちて いるよ！</p> <p>わあ、ぶどうだ！</p>  <p>教師の言葉を聞いて、ケーキ屋さんをしている友達にユズリハの実を渡しに行く子供がいた。【人】</p>	<p>② ユズリハの実に注目している子供たちに、「<u>ケーキの材料になりそうだね</u>」と話した。【L：イメージを膨らませる声かけ】</p> <p>ケーキの材料になりそうだね！</p> <p>③ ケーキ作りをしていた子供たちに「<u>ぶどうを買ってきたよ</u>」と言ってユズリハの実を渡した。【N：イメージを広げる声かけ、動作】</p>
---	---

<p>教師振り返り</p>	<p>① 「赤い絨毯みたい」と落ち葉の上に座って体で表現したり、「ばらばらするときれいだよ」と感じたことを気の合う友達に言葉と動きで伝えたりする姿が見られた。そこで教師も仲間になって子供の感じていることに共感し、周りの子供たちにも知らせて真似をしながら楽しんだことで、さらにモミジの葉への関心が高まっていた。そのことが自然物を詳しく観察したり、遊びに取り入れようとしたりする姿につながったと考える。</p> <p>② 子供の言葉を使って、ユズリハの実を「ぶどう」と呼び、「ケーキの材料になりそうだね」とイメージを膨らませる声をかけた。そうすると、教師の言葉を聞いた子供が、同じように自分の拾った実を、ケーキ作りをしている友達に渡しに行く様子が見られた。</p> <p>③ 「ケーキ屋さん」の遊びの「お店屋さん」というイメージを広げるために、「拾ってきた」や「持ってきた」という表現ではなく、「買って来たよ」と言って渡した。その後、子供が自分のケーキのイメージを膨らませ「ぶどう」をトッピングする姿につながったと考える。</p>
---------------	---

(2) ユズリハジュースを作ろう！

<p>子供の姿</p> <p>拾ってきたユズリハの実を使ってジュース作りが始まった。【もの、こと】</p> <p>これ（ユズリハ）で、ジュースを作るよ！</p> <p>水がいるから持ってくるね！</p>  <p>僕は、水をいっぱい入れたんだよ。</p>	<p>教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照</p> <p>④ 子供たちの作ったジュースを見て、色（濃度）が違うことを驚いた様子で伝えた。【B：五感を刺激する働きかけ】【P：周囲に広める】</p> <p>2人のジュースの色、全然違うね！</p> 
---	--

教師の驚いた様子を見て、嬉しそうに自分のジュースの作り方を友達に伝えた。また、近くの友達のジュースの色を見て作り方を予想する子供もいた。さらに、ザクロの実でジュースを作っている友達のジュースとの色の違いにも気付いた。人、こと

ねえねえ、お茶みたいな匂いがするんだよ。



僕は水を少なくして、こう（つぶす）したの。

⑤ 教師にジュース作りの経過を見せに来たり、発見を伝えに来たりした子供の行動を真似し、共感した。【A：感じたことに共感する】【C：五感を通して素材と関わる姿を見せる】【J：幼児の表現を受容する声かけ、真似】

くんくん。本当だ、匂いがするね。



教師の振り返り

- ④ 同じ場でジュース作りをしている子供たちに友達の表現にも目を向けてほしいと考え、同じユズリハの実を使っても、色が違うことを驚いた様子で伝えた。そうすると、子供たちが自ら水の量や実の量に注目して自分のジュースの作り方を言葉で表現したり、友達や教師に伝えようとしたりする姿につながった。また、違う実でジュースを作っている友達の様子にも興味をもち、実の種類にも目を向けていた。
- ⑤ さらに表現しようとする気持ちを高めてほしいという思いから、教師は子供が作っているものを見せてくれたり、知らせてくれたときには、受容したり、子供の行動（匂いを嗅ぐ、触ってみるなど）を真似たりした。そうすることで、子供は笑顔を見せ、続けてジュース作りに向かう姿が見られた。このことから、子供の表現を受容することは、安心して表現したり、自分のやりたいことに向かって夢中になって取り組んだりする姿につながっていると考え。

(3) 赤土でとろとろチョコレート！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>チョコレートを作るために赤土に水をかけた。そして、バケツに赤土を入れてスコップで混ぜた。もの</p> 	<p>⑥ その姿を受けて「おいしいチョコレートソースで新作のケーキができそうだね」と声をかけた。【L：イメージを膨らませる声かけ】</p>

「チョコレートソース」「どろどろ～」などと赤土の様子をリズムカルにつぶやきながら、バケツの周りを回り、スコップでチョコレートを混ぜていた。友達と一緒に混ぜることを楽しんでいた。【人、こと】



チョコレートソース♪



どろどろ～。

どろどろ～。

作ったチョコレートソースをドレッシング容器に入れて、匂いを嗅いだ。【こと】



(容器に入れながら) とろとろ～。

きなこの匂いがする！



教師と一緒に赤土でケーキの土台を作り、チョコレートソースをかけた。【もの】



チョコレートソースをかけるためののケーキを作ろう！

おいしそう、(チョコレートソースをかけたケーキが) きらきらしているよ。

ケーキ屋さんの場に、作ったケーキを運んだ。【こと】

- ⑦ 子供の動きを真似しながら、子供の動きや赤土の見た目、赤土が変わってきた様子等について声をかけたり、一緒に触ったりした。【B: 素材の様子をオノマトペで伝える】
【D: 素材の特性を幼児に言葉で伝える】



くるくるするといいんだね。

とろとろチョコレートがもっとぶるぶるになったね。

- ⑧ 作ったチョコレートソースを入れるためのドレッシング容器を用意した。それを提示し、教師が実際に使い方の手本を見せた。【G: 新しい道具の提供】【H: 道具の使い方の提示】
- ⑨ 子供の発見に共感し、匂いを嗅いで「本当だ、きなこドリンクに変身したね」と声をかけた。【A: 幼児の感じたことに共感する】
【C: 五感を通して素材と関わる】

本当だね。きなこだ！

- ⑩ チョコレートソースをかけた後のケーキを見て、様子が分かるように声をかけた。そしてチョコレートソースをお客さんの前でかけることを提案した。【J: 表現を受容する】
【I: 遊びの提案】

おー！とろとろでとってもおいしそう！！

お客さんの前でかけてみるのはどうかな。

教師の

- ⑥ 赤土山での遊びは春以来で久しぶりであった。これまでにいろいろなケーキを作っていたことから、チョコレートのようにとろとろになる赤土を思い出し、遊びに取り入れたのではないかと推察した。そこでケーキ作りのイメージを膨らませることができるよう声をかけた。目の前の赤土との触れ合いを存分に楽しみ、水を混ぜてさらに

振り返り

感触を楽しむ姿を大切にするとともに、「ケーキ作り」のイメージももって遊んでほしいという願いもあり、ケーキ作りと結びつけて声をかけた。

- ⑦ 赤土に水を入れ、とろとろになる感触を味わう姿が見られた。そこで子供の真似をして一緒に触ったり、感触をオノマトペで伝えたりした。子供がリズムカルに言葉を口ずさみ、全身を使って表現していた様子から、楽しんでいることがよく伝わってきた。教師が伝えた「とろとろ」や「ぷるぷる」という言葉を、その後子供たちも使っており、より感触を楽しんで遊ぶ姿につながった。
- ⑧ 以前、ザクロの実でジュース作りをしているときに、実を多く入れることで濃度が高くなっている様子があったので、植物を使ったソースを提案しようと、ドレッシング容器を用意していた。ケーキ屋さんの道具としてケーキ作りに活用してほしいという思いもあったが、まずはソース作り遊びを存分に楽しんでほしいと考えたため、子供のチョコレートソース作りがひと段落したタイミングで提示した。そうすることで、新たな道具であるドレッシング容器に興味を示し、「使ってみたい」という意欲が高まり、できたチョコレートソースを嬉しそうに入れる姿につながった。
- ⑨ 五感を通して素材（赤土）と関わる姿を見て、教師も子供を真似て同じように赤土に関わり、発見したことに共感した。そうすることで子供はさらに素材に興味を示し、継続して遊びに取り組んだ。「チョコレート」を作っている過程で、匂いを嗅ぐと少し香ばしいような匂いがしたことから「きなこ」と言葉で表現したと推察し、作っているチョコレートとはイメージが異なるが「きなこ」という表現を受容し、子供の感じていることに共感した。
- ⑩ 作ったチョコレートソースを生かしてケーキを作ることができるように、ケーキの土台を子供と一緒に赤土で作った。そして、子供がチョコレートソースをかけたタイミングで「どうかな」と尋ねた。「おいしそう、きらきらしている」などと話していた姿から、自分で作ったチョコレートソースを使ったケーキに自信をもつことができたと考える。また、チョコレートソースをかけた瞬間のケーキを「きらきらしている」と嬉しそうに子供が表現していたことから、お店に来た客（友達）の前でかけることを提案した。すると教師の提案に賛同し、ケーキ屋さんの場に自分の作った赤土のチョコレートケーキを急いで運び、お店屋さんの準備にすぐに向かう姿につながったと考える。

(4) さあ、お店を開こう！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>もう少しで葉っぱチョコケーキができるから、待っててね！</p>  <p>ケーキ屋さんの場作りのために、友達と一緒にベンチやカラーかごを運んだり、作ったケーキを並べたりなどの準備をした。友達に声をかけて以前作った看板を運んだり、ケーキを並べる位置を友達と伝え合って決めたりした。もの、人、こと</p> <p>大きいケーキは上に並べよう！</p> <p>看板を持ってくるね！</p> 	<p>⑪ ケーキ屋さんの場作りに使うことができる、テーブルクロスやスプーン、ベンチやカラーかご、ビールケース等を子供が自分たちで運ぶことができるように運びやすい位置にまとめておいた。【E：イメージに合う素材や道具を使うことのできる環境の構成】</p> <p>⑫ テラスでケーキ・ジュース作りのキッチンとして使用していた2台のテーブルを1台にしてケーキ屋さんのスペースを広げた。【E：環境の再構成】</p>

	<p>⑬ 作ったケーキを並べることができるように、<u>テーブル</u>を置いた。【E:環境の再構成】</p>  <p>ケーキを並べる場所が広くなったよ。</p>
--	---

教師の振り返り	<p>⑪ ケーキ屋さんのイメージを広げることができるように、テーブルクロス、スプーン等を準備しておいた。テーブルクロスは柄をいろいろ揃えておき、子供たちが好きな柄を選ぶようにした。また、ケーキを載せることができる台（ベンチ、カラーかご、ビールケース）をまとめて置いておくことで、自分たちでケーキ屋さんの場を整えることができるようにした。</p> <p>⑫ ケーキ屋さんが開店するタイミングで、キッチンとして使っていた、このときには誰も使っていなかったテーブルを片付け、スペースを確保した。そうすることで店の周りがすっきりとし、店員や店に来た客（友達）が伸び伸びと遊ぶことができるようにと考えた。</p> <p>⑬ ⑫で片付けたテーブルを、子供たちが作ったケーキを並べることができるようにショーケースの横に再配置した。そうすることで、これまでに作って保管していたケーキも並べることができ、お店にたくさんのケーキが並ぶことで、ケーキ屋さんのイメージがより膨らむのではないかと考えたからだ。実際、以前保育室で作っていたアイスを運んでくる子供がいて、ケーキ屋さんに並ぶ商品が増えた。また、ケーキ屋さんが開店した際に、テーブルを境に店員と客の立ち位置がはっきりし、そのことでそれぞれの役割が分かりやすかったため、自然なやり取りを生むことにもつながったと考える。</p>
---------	---

(5) いらっしゃいませ、おいしいケーキがありますよ！

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>ケーキ屋さんが開店したことを周りに呼びかけると、その様子に気付いた友達が次々と集まってきた。ケーキ屋さんは店員になりきって、店に来た客にケーキを見せたり食べてもらったりした。人、こと</p>  <p>いらっしゃいませ。</p>  <p>味見をしますか。スプーンをどうぞ。</p>	<p>⑭ 教師も一緒に店員になり、子供のしている「いらっしゃいませ」「どうぞ」「どれにしますか」などの表現を繰り返したり、客になって来てくれた友達に気付くことができるような声かけをしたりした。【H:遊びの仲間になる】【J:表現を受容する】【M:イメージをつなぐ】</p> <p>お客さんが待っているみたいだよ。</p> <p>スプーンがあると、ケーキが食べやすいね。</p>

<p>自信をもって店員になりきって友達と関わって遊んでいた。人、こと</p> 	
--	--

教師の振り返り

⑭ 子供が店員になりきって様々な表現することができるように、開店前に話し合ったり台詞を決めたりする援助ができればよいと考えていたが、子供たちは、ケーキを並べるとすぐにお客さんを呼びたい気持ちになっていた。そこで、子供たちの店員になりきっている台詞を繰り返したり、友達の様子に気付くことができるように声をかけたりすることで、ケーキ屋さんのイメージを膨らませ、店員になりきってやり取りを楽しむことができるようにした。1対1のやり取りをしている中で子供はそれぞれ、自分なりの店員のイメージをもって接客をする様子が見られた。客として来てくれた友達には敬語を使うなど、言葉遣いを変えることで表現する姿も見られ、ケーキ屋さんの店員になりきって遊ぶことを楽しんでいるようだった。

3 考察

子供の「ケーキ屋さんを開きたい」という思いを実現することができるように、道具の準備や環境構成など、事前の援助を工夫し、(⑧、⑪) さらにその時々の子供たちの反応を意識して保育を行ってきた。ケーキ作りに自然物を使う姿から、さらに自然物への興味を深めることができるように、教師も一緒になって遊んだり、イメージが膨らむような声かけをしたりすることを意識してきた。(①、③、⑦) その際、オノマトペで知らせたり、教師が率先して子供たちの発見を周りの幼児に伝えたりすることで、子供の感性にも働きかけることができるように心がけた。(⑤、⑥) そうすることで、遊びながら素材の特徴に気付きそれを使ってさらに工夫しようとしたり、友達の表現に目を向けて自分の表現を振り返ったりする姿につながったと考える。(④、⑤) また、そのような姿を教師が受容し声かけをしてきたことで、自分の遊びや表現に自信をもつことにもつながったと考える。これらの援助が子供たちの伸び伸びと表現する姿を支え、「ケーキ屋さんを開く」という表現の形で、友達や教師に自分の遊びのイメージや作品の工夫したところを伝えようとするきっかけになったのではないかと考える。

一方で、難しいと感じる場面もあった。“子供が主体の遊びにしたい”という思いが教師の中に強くあり、今回のケーキ屋さんごっこでは、ものや場の準備だけでなく、言葉や動き等も想定するといった準備をしてから店を開くようにしたいと考えていた。そうすることが子供の表現を広げると考えていたのだが、そのような準備をするタイミングをつかむことは難しかった。しかし、子供たちは遊んでいる中で、自分なりの店員のイメージを、言葉や身振り手振りで表しながら客の友達と1対1のやり取りをしていると分かった。子供の自分なりになりきって表現している姿を認めたり、それを周りの子供に広めたりしていくことで、さらにそのイメージが深まっていくのではないかと考える。また、教師がモデルとなって表現する姿を積極的に見せることで、具体的なイメージがもてていない子供にもきっかけを作ることができるのではないかと考えた。子供の姿から、今どのような表現をしているのか、今、楽しさを感じているのは何かということをしかりと見取り、それに合わせて援助していくことの大切さを学

んだ。(14)

他にも、ケーキ屋さんごっことは違う遊びをしている子供たちに、その遊びのイメージに浸って声をかけることで互いの遊びがつながったという場面もあった。魔法使いごっこをしている子供たちに、教師がケーキ屋さんの開く時間を伝え、「おいしい魔法をかけに来てね」と声をかけたことで、後にケーキを作っている子供たちのもとへ魔法をかけに来る姿があった。「〇〇ちゃん、魔法を練習してきたよ」「せーの、『魔法のケーキ、きらきらポン』と手製のステッキを振って友達が作ったケーキにおいしくなるように魔法をかけていた。教師もそれを見て、「ケーキがすごくおいしそうになったね、もっときらきらになっているね」と一緒に声をかけたことで、ケーキを作った子供も魔法をかけた子供も笑顔になった。その後、ケーキ屋さんが開いたあとも魔法使いをしていた子供たちが客になってやり取りをする姿につながっていた。このことから、教師がイメージをつなぐ声かけの援助をしたことで遊び同士がつながりそれが表現する子供の姿を広げることにもつながったと考える。このようなイメージをつなぐ援助、子供同士をつなぐ援助を積み重ねてきたことで子供たち同士の関心の寄せ方が高まってきていると考えられる。例えばで葉っぱを投げて楽しんでいる友達の姿を見て、「何をしているの」と興味をもって質問し、一緒に葉っぱのシャワーごっこを楽しんだり(①)、見付けた実をケーキ作りの遊びをしている友達に届けたり(②)、店員になりきっている友達の姿を見て自分もお客さんに言葉をかけてみたり「こうするといいよ」とアイデアを伝えたり(④)する姿が見られたことから分かる。これは、この時期の4歳児らしい姿である。友達に自分のしていることを伝えることで自分がしていることを認識したり、相手の話を聞くことで友達の表現を自分の遊びに取り入れたりしており、表現する子供を周りの子供が支えているといえる。

■援助の事例表 4歳児（11～12月）

1 「感性」に関わる教師の援助のカテゴリと事例

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
A 感じたことに共感する	幼児の感じたことに共感する声かけ	「こっちの方がきれい」とセロハンを選んだ幼児に対して、「本当だね、きれいだね」と言う。
	幼児の感じたことに共感し一緒に楽しむ取組	毛糸の感触を楽しむ子供の言葉を繰り返し、「気持ちいいね」「温かいね」と言いながら一緒に毛糸を触る。
B オノマトペで伝える	感触をオノマトペでの伝達	毛糸の感触を「ふわふわだね」「もこもこするね」などとオノマトペで伝える。
C 五感を刺激する働きかけ	五感を通して素材の特徴に気付くことができるような提示	初めて使うアルミホイルを提示する際に、幼児の目の前でひらひらさせながら見せる。
	五感を通して素材の特徴に触れ合う時間を設定	毛糸の感触を楽しむことができるように、毛糸そのものと十分に触れ合う時間を設ける。
D 特性を伝える	素材の特性に気付くことができるような提示	アルミホイルの特徴が丸める前後で変化するということに気付くことができるように、幼児に実際に見せながら比べる。
		セロハンの透けているという素材の特徴が分かるように、「向こうが見えるよ」と目の前に当てながら提示する。

2 「表現」に関わる教師の援助

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
E 環境の構成	素材を使うことのできる環境の構成	みんなと一緒にの時間に使ったセロハンを自由に使うことができるように素材コーナーに置いておく。
G 素材、材料、道具の提案	幼児の意図に合う素材の提案	折り紙で長い魚を作ろうとしている幼児に、魚作りの材料として新聞紙を提案する。
H 見本・モデルの提示	道具の扱い方の提示	ドングリをボンドで接着したいと思っている幼児らの前で接着の仕方をやって見せる。
	幼児のイメージに合う素材の提示	透明なガラスの中に入れるジュースの素材として、花紙とセロハンを用意し提示する。
	幼児の表現したいものを実現するための見本の提示	作りたい魚の色や形等の具体的なイメージをもっていない幼児と一緒に図鑑を見る。 手紙を描きたいという幼児の思いを聞き、書きたい文字の見本を提示する。

I 遊びの提案	幼児のイメージに合う作品作りの技法の提案	拾ってきた葉が乾燥していて、触るとばらばらになったので、画用紙にボンドで絵を描いて上から細かくなった葉をふりかけることを提案する。
	幼児の作品を活かす遊びの提案	幼児が作った魚を使ったお寿司作りの遊びを提案する。
		幼児が作ったレジを寿司屋の遊びで生かすことができるように、ポイントカードにシールを貼る遊びを提案する。
幼児の意図に合う製作の提案	お寿司屋さんの衣装のはちまきを作ることを提案する。	
J 表現を受容する	幼児の表現を受容する声かけ	場面ごとに工夫している忍者のポーズの動きを「素早く手を動かすところがいいね」「すぐに立てるようにしゃがむポーズがかっこいいね」などと認める。(劇遊び)
K イメージを引き出す	表現しようとする意欲を引き出す例示	園庭にある木の実をたくさん集めている幼児に、葉に木の実を乗せ「料理みたいになったよ」と見せる。
L イメージを膨らませる	幼児のイメージを膨らませる声かけ	「どんな忍者になりたいのかな」と尋ね、声の大きさ、動きの素早さ等の工夫できるポイントを示す。
M イメージをつなぐ	幼児のイメージに合わせた声かけ	魔法使いの遊びをしているが、ケーキ屋さんの遊びに興味をもっている幼児に「ケーキ屋さんがオープンしたらケーキに魔法をかけに来てね」とケーキ屋さんの遊びと魔法使いの遊びがつながるように声をかける。
N 物語化	幼児のイメージに合わせた働きかけ	ユズリハを見つけた幼児と一緒に「ぶどうを買ってきたよ」と言ってケーキ屋さんの遊びをしている友達に渡す。
O 視覚化	幼児の気付きや経験を視覚化する	ケーキ屋さんごっこの話をしているときに、幼児のアイデア(看板作り)や経験したこと(トッピングとして使った葉や実)をボードに絵や言葉でかき留めておく。
P 周囲に広める	友達の表現に興味をもつための声かけ	「手をぴんと伸ばすと強そうな忍者に見えるね」「足を曲げてからジャンプをすると高く跳べるね」などと幼児のしている忍者のポーズを周囲の友達に広める。
	幼児の表現したいものを実現するための声かけ	大きな魚を作りたいがどのように作ってよいか分からない幼児の思いを聞き、その思いを周囲の友達に広め、アイデアを出し合う。
Q 共有する機会の設定	幼児の表現したいものを実現するための場の設定	回転寿司のイメージをもっている幼児が客席に寿司の皿を運びたいと思っていることをクラスの友達に知らせ、友達の考えを聞く場を設ける。

◇事例4 水族館づくり 5歳児（12月）

1 これまでの子供の姿と遊びの経緯

本園では、研究一年次に5歳児11～3月に見られる表現する子供の姿を「友達との共通の目当てに向かって思いや考えを伝え合いながら、自分たちの遊びをよりよくしていこうとする」と捉えた。この姿を期待し、保育の中で援助を続けてきた。ここでは、12月の「水族館づくり」の事例から教師の援助を紹介する。

5歳児ふじ組の子供たちは、友達とやってみたいことや考えたことを伝え合い、素材の選択や使い方、遊びの進め方を一緒に考えている。11月に生活発表会が行われた。そこで見せる劇遊びの物語や披露するものを子供たちが出し合って決めたこと、衣装や背景画づくり等も含め、友達と力を合わせて劇遊びをつくっていった経験も大きく影響しているだろう。

ある日、魚を作っていた子供たちが、保育室で水族館の遊びをやりたいという思いをクラスの友達に伝えたことをきっかけに、水族館づくりが始まった。ペットボトルや新聞紙等の身近な素材を使い、イルカや貝等の生き物を製作した。また、水族館に行った経験から「水中トンネルがあったら楽しいな」とイメージを膨らませ、段ボールを使って水中トンネルを製作する姿も見られていた。

2 保育の実際

(1) どんな水族館を考えているのかな？

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名p.11参照
<p>子供たちは海の生き物を作っていたが、教師が吊り下げたビニールに生き物を展示する様子は見られなかった。もの</p> <p>子供たちは水槽を作って生き物を展示したいという思い、水槽が並んでいるというイメージを話した。また、プールを作って生き物を泳がせたいと考える子供もいた。こと</p>	<p>①保育室に水に見立てた青の透明ビニールを吊り下げた。【E：展示場所の設定】【L：イメージを膨らませる場の設定】</p>  <p>②遊びについて話す「お話タイム」の中で、これから水族館の遊びをどうしていこうと思っているのか尋ねた。【K：表現したいものを尋ねる】【Q：表現したいものを説明する場の設定】</p>

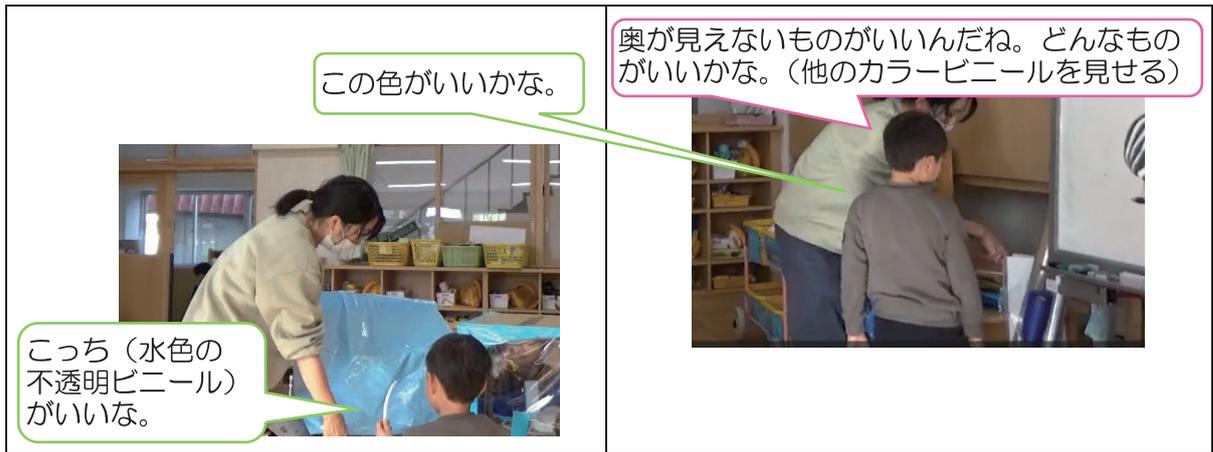
教師	① 教師は、子供たちが作った海の生き物を飾って展示することができると考え、保育室に青の透明ビニールを吊り下げた。また、展示したい生き物を考えて製作したり、水
----	--

族館のイメージを膨らませたりする姿につながるのではないかと考えた。

- ② 子供たちが①の青の透明ビニールに生き物を展示しなかったことから、子供の思いを尋ねることにした。子供たちは、自分たちが作った水槽やプールでの展示を考えていること、それぞれが作った水槽を並べて展示をするという水族館のイメージを話した。そこで、教師は子供たちの思いを読み違えていたことに気付いた。そして、それが理由で遊びが広がらなかったのだと振り返った。「お話タイム」という場を設定し、子供たちに思いを聞き直したことで、本当の思いを理解することができた。

(2) 水族館の生き物や水槽を作ろう

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>ペットボトルとビニールでウツボ、段ボールとテーブルクロスシートで水槽というように、自分の作りたいものに合った素材を選び、製作していた。【もの】</p> <p>ウツボの体にはペットボトルを使おう。ビニールはペットボトルに巻けるね。</p> <p>体の色は茶色。</p> <p>歯はちくちく。画用紙を切って貼ろう。</p> <p>水槽の内部に色を付けようとしている子供が、使いたい素材について教師に相談した。【もの】</p> <p>青か水色のものがいいな。</p> <p>透明な青は段ボールが見えちゃう。</p>	<p>③素材コーナーを増設し、ペットボトル、お花紙、青・水色ビニール、テーブルクロスシート、半球形スチロール等様々な色、材質の素材を置いていた。そこに、様々な色の画用紙とビニールを加えた。また、別の場所には、段ボールや青・水色ガムテープを数を増やして準備しておいた。【E：イメージに合う素材の準備】</p>  <p>④子供の思いを受け、青の透明ビニールや水色の不透明ビニールを見せながら提案した。【G：イメージに合う素材の提案】【D：素材の様子を見せる】</p> <p>青ならこんなもの（青の透明ビニール）はどうか。</p> 



教師の振り返り

③前日の子供の姿から、ウツボや水槽のように作りたいものや展示方法のイメージを明確にもっていることが分かった。素材を選び、自分のイメージしたものを作り上げる喜びや達成感をもつとともに、その作ったものや素材の使い方等が周りの子供の刺激になり、互いの遊びに目を向けるきっかけになると思い、様々な素材を準備した。前日、マジックやテープで生き物の体のパーツや模様を付けたりする子供の姿があった。自分が思う形や大きさに切ることができる画用紙を提供することで、子供たちが生き物のパーツや装飾等に使い、よりイメージを実現できるようになるのではないかと準備した。また、ビニールの柔らかさに注目し、ビニールで生き物を作りたいと考える子供がいたことから、色を増やして置いた。どちらも作りたいもののイメージに合わせて選ぶことができるよう、様々な色を準備した。段ボールは、前日のお話タイムの中で水槽を作りたいと考えている子供が多くいたこと、段ボールで水槽を作っている子供がおり、その水槽に注目している子供がいたことから、この日は段ボールを使った水槽作りをする子供が増えるだろうと予想し、数を増やした。青・水色テープは、子供たちが水や水槽のイメージに合う色としてたくさん使いたいと思うのではないかと考えて準備した。

前日のお話タイムの中で、子供たちの本当の思いを理解することができた。そして、教師自身が援助を振り返り、それを踏まえて、提供する素材を見直したことで、水槽を作る子供が増えていった。また、イメージを明確にもつ子供たちの姿から、素材を準備したり、増やしたりしたことで、色や素材の特性に注目し、自分のイメージしたものを作り上げる喜びや達成感につながったと考える。一方で、互いの遊びに目を向けるためには、「この歯、ちくちくしているね。何を使ったの?」と尋ねたり、「画用紙を三角に切ったらちくちくになったんだね」と子供の表現を広めたりするなどの援助があれば、互いの遊びに目を向ける姿へとつながったのではないかと考えた。

④子供の「青か水色のものにしたい」という思いを受け、素材コーナーにある青の透明ビニールを見せたが「奥が見えないようにしたい」という思いもあることが分かった。そこで、他のカラービニールを見せると、水色の不透明ビニールを選んだ。子供の思いを聞きながら透け方の違うビニールを提案したことで、イメージに合うものを選ぶことができたようだ。今回は子供がもつ水や水槽のイメージを「青や水色」「透明」「艶のあるもの」と予想し、ビニールを用意・提案したが、素材の選定についてはさらに考える余地がありそうだ。例えば、不透明の青や透明の水色ビニールを用意するとより色や透け方に注目して素材を選択したかもしれない。また、不織布や布等、同じ色でも厚みや材質の異なる素材を提案することで、子供が素材を比べ、選択しながら自分のイメージを実現させていくことができるのではないかと考える。

(3) 赤ちゃんジンベエザメができたよ

子供の姿	教師の援助【アルファベット】はカテゴリ名 p.11 参照
<p>赤ちゃんジンベエザメを作っていたA児が、製作していた場所で「ちっちゃいジンベエザメ、できた」と言った。 もの、 こと</p> <p>ちっちゃいジンベエザメ、できた。</p>	<p>⑤その声を聞き、T1は少し離れた場所から「できたの?」と声をかけた。【P：友達の作品に興味をもつ声かけ】</p> 
<p>すると、A児はにこにこしながら赤ちゃんジンベエザメを見せにやってきた。 もの、 人</p>	<p>⑥T1は、A児の赤ちゃんジンベエザメを見て「わあ、かわいいね」と声をかけた。【J：表現を受容する声かけ】</p> <p>わあ、かわいいね。</p>
<p>近くで水族館づくりの遊びをしていた友達が、赤ちゃんジンベエザメを見て驚いたり、「かわいい」と声をかけたりした。 もの、 人</p> 	
<p>その後、A児は赤ちゃんジンベエザメを両手で大事そうに持って保育室を歩き、「どこに行けばいいんだろう?」と赤ちゃんジンベエザメになりきってつぶやき、保育室の中で泳がせて遊んでいた。 もの、 こと</p> <p>どこに行けばいいんだろう?</p>  <p>そうだった!</p> <p>お母さんがいるんじゃないかな?</p>	<p>⑦その様子を受け、T1は、A児に以前作ったお母さんジンベエザメの存在や水槽について伝えた。【I：作品を活かす遊びの提案】【N：イメージに合わせた声かけ】</p>



A児は赤ちゃんジンベエザメを水槽へ連れて行き、お母さんジンベエザメの背に乗せた。そして、A児がワークスペースに作った水槽に親子を一緒に泳がせた。[もの、こと]

その後、テラスに行き、園庭にいた友達やT2に赤ちゃんジンベエザメができたことを知らせた。その後、しばらくして保育室に戻った。[人、こと]



T2の言葉を聞いて、園庭で遊んでいた子供たちはワークスペースにジンベエザメを見に行った。[人、こと]



⑧ T2は少し時間をおいてからA児の思いが伝わるように言葉を言い換え、園庭で遊んでいた子供たちに伝えた。【P：友達の作品に興味をもつ声かけ】

「ジンベエザメができたから見に来ない？」って言ってたね。どうする？



⑨ T2は、園庭から来た子供の後からジンベエザメを見に行った。また、「小さい声で話さなくちゃ」と言い、本物の赤ちゃんと接するように関わった。そして、A児に赤ちゃんジンベエザメが生まれた日を尋ねた。その後、目の大きさや柔らかさ等、見たり触ったりして感じたことを伝えた。【N：イメージを膨らませる関わり、言葉の表現】

12月14日。今日!

一緒に見ていた子供たちも「赤ちゃん」というイメージに浸り、赤ちゃんジンベエザメを優しく触った。A児は、さらにイメージを膨らませ、お父さんジンベエザメや飼育員の名札を作ること等、やりたいことを見付けて取り組んでいた。もの、人、こと

ジンベエザメの赤ちゃんが生まれたの?どこどこ?

赤ちゃんを驚かせないように小さい声で話さなくちゃ。

いつ生まれたの?

A児

A児

柔らかいね。

どうしてここは赤いの?

目、大きいね。

A児

教師の振り返り

- ⑤ T 1 は、A児の作り上げた赤ちゃんジンベエザメと一緒に水族館づくりをしている子供に広め、同じ遊びをしている友達の様子に興味をもつことができるようにしたいと思っていた。そのとき T 1 は少し離れた場所にいたため、その場所から A児に向かって声をかけた。すると、その声をきっかけに、周囲の子供たちも赤ちゃんジンベエザメを見に来て感じたことを伝えていた。ここでさらに「赤ちゃんジンベエザメができたんだって」と驚いた様子で周囲に呼びかける声をかけていたら、保育室の中の離れた場所で遊んでいた子供とも遊びの様子たちに共有できたかもしれない。
- ⑥ A児はにこにこしながら赤ちゃんジンベエザメを見せにやってきた。その姿から、赤ちゃんジンベエザメの完成を喜び、愛着をもつ様子が伝わってきた。教師は、「わあ、かわいいね」と声をかけて A児の表現を受容した。その後、A児は友達からも「かわいい」「すごい」と声をかけられた。教師や友達に認められたことで、赤ちゃんジンベエザメを作った喜びが増し、A児の自信につながったのではないだろうか。
- ⑦ A児は赤ちゃんジンベエザメを大事に持って保育室を歩き、赤ちゃんジンベエザメになりきって話しながら遊んでいた。その姿を受け、以前作ったお母さんジンベエザメや水槽を使い、よりイメージを膨らませて遊ぶ姿を期待した。そこで、T 1 は A児にお母さんジンベエザメや水槽の存在を伝えた。A児はその話を聞いた後、水槽でジンベエザメの親子を一緒に泳がせに行った。しかし、A児の「どこに行ったらいいんだろう?」という言葉や様子を改めて振り返ってみると、A児は、大事な赤ちゃんジンベエザメを作った喜びやもっと見てもらいたいという気持ちを表現していたのかもしれないとも考えられる。
- ⑧ T 2 は、A児の「ジンベエザメ、できた」の言葉を受け、少し時間をおいてから『「ジンベエザメができたから見に来ない?」って言ってたね。どうする?』と言葉を補って園庭で遊んでいた子供たちに尋ねた。T 2 は、A児の思いを再度伝えることで、園庭で遊ぶ子供たちが保育室で遊ぶ子供たちの遊びに気付くきっかけになるようにと考えていた。また、A児は、前日から赤ちゃんやお父さんジンベエザメを作りたいと話していた。そして、赤ちゃんジンベエザメができたことを何度も知らせていた。T 2 は、前日の A児の姿やこの日の赤ちゃんジンベエザメを見てほしいという A児の思いを大切に、その思いが伝わるように言葉を補いながら周囲の子供たちに伝えていた。T 2 の言

葉をきっかけに、園庭で遊んでいた子供たちは、A児の作ったジンベエザメに目を向けていた。友達の遊びや様子への興味や関心を深める場面となった。

- ⑨A児は、赤ちゃんジンベエザメが「できた」と表現していたが、T2は「生まれた」と言葉を変えて声をかけた。また、本物の赤ちゃんに接するときのように、「小さい声で話さなくちゃ」と言った。「生まれた」という表現や赤ちゃんに接する関わり方によって、赤ちゃんジンベエザメが「作ったもの」から「生き物」に変わり、子供たちもさらにそのイメージに浸りながら関わっていた。「生まれた」という言葉をきっかけに、それを聞いた子供たちも「生まれたの？」と表現した。また、ジンベエザメを触ったり、感じたことを伝えたりする中で、子供たちは、さらに興味をもち、イメージを膨らませた。教師のかける言葉の表現やものとの関わり方によって「生き物」や「水族館」のイメージに浸って遊ぶ姿につながったと考える。

3 考察

前日の生き物を作る子供たちの姿から、素材コーナーに画用紙やビニールを加えた。また、事前に子供たちの話を聞いたことで、これまで「水槽を作って生き物を展示したい」「水槽を並べたい」といった子供の思いやイメージを教師が読み違えていたことに気づき、その思いに合うと予想した段ボール箱や青・水色テープの数を増やした。(③) そうすることで、イメージに合った素材を選びながら自分の作りたい魚や水槽を製作するというように遊びが広がっていき、子供たちの喜びや達成感につながっていったと考える。このことから、振り返りの大切さ、教師自身が自分の捉えを見直してみるものの大切さに気付いた。さらに、子供の本当の思いに気付いたときの教師が柔軟に環境の構成の援助をしていくことで、子供の遊びたい、もっと楽しみたいという気持ちが高まってくると考える。

また、(3)の事例では、ジンベエザメが「できた」というA児の言葉を、T2は「生まれた」と言葉を言い換え、本物の赤ちゃんに接するように関わった。(⑨)このような教師の言葉の変換や関わり方によって、子供たちはA児のジンベエザメを作ったものではなく、「生き物」として関わるようになり、A児のジンベエザメに注目し、友達の遊びへの興味や関心を深めることができた。A児は自分の作ったジンベエザメにより愛着をもち、さらにイメージを膨らませ、お父さんジンベエザメや飼育員の名札を作ること等、やりたいことを見つけて取り組むことができた。子供がイメージを膨らませてより遊びを発展させていこうとする前向きな心もちは、友達と一緒に遊びを展開していくことの楽しさを味わうことにつながっていた。この場面は、この水族館づくりの事例において、「表現する子供の姿」(一年次作成)にある「自分たちの遊びをよりよくしていこうとする」姿を具体的に表していた。

この日の水族館づくりでは、個々の思いの実現に向けて遊ぶ姿も多かった。子供たちが、個々の思いを実現した後に、同じ遊びをする友達と共通の目当てをもって遊びを進めていく姿を期待したい。水族館づくりの遊びの中でも、「クラスみんなで楽しむ」「隣のクラスの友達を招待する」「小さな学年の友達を招待する」など、友達と目当てが共有されることで、遊びに必要なものを考え、友達と遊びを展開していく姿につながると考える。共通の目当てをもつためには、互いの思いの伝え合いやすき合わせが必要となる。教師は、その場を設定したり、子供の思いを整理したりしていくことが大切だと考える。また、子供たちがその目当てを自然に意識することができるように、子供たちに寄り添いながら環境を整えたり、タイミングをみて水族館のお客さんとなる相手を意識できるような声をかけたりするなどの援助を、見通しをもってしていくことが大切だと考える。

■援助の事例表 5歳児（11～12月）

1 「感性」に関わる教師の援助のカテゴリと事例

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
A 感じたことに共感する	幼児の感じたことに共感する声かけ	園庭に落ちていたモミジやイチョウの葉を拾い、大きさや色に注目しながら「かわいい、きれい」という幼児に「かわいいね、こんなに小さい。色も違うね、きれいだね」と声をかける。
		保育室の壁に貼った青の透明ビニールを見て「向こうも見えてきれいだね」と話す幼児に、「きれいだね」と声をかける。
		絵の具を混ぜて水の色を作り、「とってもきれいな色ができたよ」と見せる幼児に、「とってもきれいだね」と話す。
C 五感を刺激する働きかけ	音の特徴に気付くことができる声かけ	園庭で見つけた藤の鞆を両手に持ち、鞆同士を叩くと音が出ることに気付いた幼児にどのような音がするか尋ねる。
	色の特徴に気付くことができる声かけ	絵の具を混ぜて水の色を作っている幼児らが色の特徴や変化に気付くことができるように、混色の様子を尋ねる。
D 特性を伝える	特性の違いに気付くことができるような様々な素材の準備	様々な素材の特性を感じられるように、貝作りの材料として工作紙、画用紙、新聞紙を準備する。
		素材の特性を感じられるように、水中トンネルの材料として透明ビニール、青の透明ビニール、水色の不透明ビニールを準備する。

2 「表現」に関わる教師の援助

カテゴリ	サブカテゴリ	援助の事例
E 環境の構成	幼児の意図やイメージに合う素材の準備	自分が作りたい海の生き物のイメージに合う素材を選ぶことができるように、紙やカップ、テープ等様々な素材を用意して、素材置き場に置いておく。
	道具や素材を使うことのできる環境構成	水中トンネルに色を塗りたい幼児らが自分たちのイメージする色を作ることができるように、絵の具や筆を自分たちで使うことのできる場を整えておく。
F 素材、材料、道具の提供	幼児の意図やイメージに合う素材の提供	水中トンネルに色を塗りたい幼児らに、青、水色、白の絵の具を提供する。
G 素材、材料、道具の提案	幼児の意図やイメージに合う素材の提案	「白くて曲がる」というイカのイメージをもっている幼児に、ストローやモール、シーリング材を提案する。
		ペットボトルキャップを見ながらカンパチの立体的な目の作り方を考えている幼児に、半球型の発泡スチロールを提案する。
H 見本・モデルの提示	幼児の表現したいものを一緒に作る取組	新聞紙を使った巻貝の作り方に悩んでいる幼児の様子を見て、新聞紙を使って巻貝を作って見せる。
	素材の扱い方の提示	細くちぎった新聞紙を巻いて巻貝を作っている幼児に、ねじって棒状にした新聞紙を巻いて教師が製作した貝を見せる。

K イメージを 引き出す	幼児の表現したいもの の聞き取り	園庭の藤の鞘を集め、「木琴みたいにならないかな」と話す幼児に、「木琴ってどんな感じかな」と木琴のイメージを尋ねる。	
		作った魚を使って水族館の遊びをしたいと思っている幼児らが飾り方に目を向けることができるように、「どうやって飾るのかな」と声をかける。	
		作った魚を使って水族館を作りたいと考えている幼児に「どんな水族館を考えているのかな」と尋ねる。	
		色塗りをした劇遊びの背景画について「背景画はこれで完成でいいかな。みんなの考えたお話の絵になっているかな」と尋ねる。	
L イメージを 膨らませる	幼児のイメージを膨らませる 機会の設定	劇遊び中の台詞を言う時の動作を考えるとときに、友達の台詞を言いながら振りをつけて遊ぶ機会を設ける。	
	幼児のイメージを膨らませる 提案	友達がしている海の生き物作りの様子を知り、水族館の遊びに必要なものを考えることができるように、作った海の生き物を種類ごとに置くことを提案する。	
	幼児のイメージを膨らませる 声かけ	クラスの友達にお化け屋敷を楽しんでもらいたいと思っている幼児らに、「どうやったら楽しんでもらえるかな」と声をかける。 トンネルの上部を丸くしたいと思い、「どうやったらできるかな」と考える幼児らに、「そういう形になるもの、みんなの知っているもので何かあるかな」と声をかける。	
M イメージを つなぐ	イメージをつなぐ 声かけ	以前から人形ショーの遊びをしていた友達がどのように遊びを進めてきたのかが分かるように、新たに遊びに加わった幼児に「どうやって遊ぼうと思っているのか聞いてみたら」と声をかける。 人形ショーをしている幼児に「これから一緒に遊ぶ友達にこれまでどんなものを作ったのか伝えてみたら」と声をかける。 トンネルの上部を丸くしたいことを手で表す幼児の姿を受け、その形の特徴と一緒にトンネルを作る友達に伝わるように「曲がっているんだね」と話す。	
	N 物語化	幼児のイメージを膨らませる 言葉の変換	ジンベエザメを作っていた幼児から、赤ちゃんジンベエザメが完成したことを聞いたときに「生まれたの」と尋ねる。
	幼児のイメージを膨らませる 関わり	完成したジンベエザメを幼児らと一緒に見て、本物のジンベエザメに触るように優しく触れ、「柔らかいね」と言う。	
O 視覚化	幼児のアイデアの視覚化	水族館に泳がせたい生き物を幼児が提案した時に、クラスの友達に共有することができるようにホワイトボードに書き出す。	

P 周囲に広める	幼児の気付きを友達に伝える声かけ	図鑑を見ているときに「光る」という生き物の特徴に気付いた幼児の話聞き、「光る生き物があるんだね」と周りの幼児にも伝わるように声をかける。
	友達の表現に興味をもつための声かけ	赤ちゃんジンベエザメが完成したことを園庭で遊んでいた友達に知らせた時に、「ジンベエザメの赤ちゃん見に来ない？って言ってたね。どうする？」と声をかける。
		イルカショーが始まることを知らせる幼児の姿を見て、保育室やワークスペースで遊ぶ友達に「イルカショーが始まるんだって」と声をかける。
友達の表現に興味をもつために一緒に遊ぶ取組	幼児らがイルカショーの会場に集まるときに、教師も客になって幼児らとショーを見る。	
Q 共有する機会の設定	幼児が表現したいものについて説明する場の設定	作っている魚をたくさん泳がせて水族館の遊びをしたいという幼児の思いを共有できるように、クラスみんなで水族館作りについて話す場を設ける。

Ⅲ 研究のまとめと次年度への課題

1 研究のまとめ

本年度は、教育課程や研究一年次に作成した「表現する子供の姿」(p. 2)を基に保育の計画や実践を行った。そして、保育中の子供の姿から、教師の援助についての考察を繰り返し、豊かな感性と表現する力を育むための教師の援助を探った。

主な成果は2つ挙げられる。

一つ目は、本年度作成した「援助カテゴリ」一覧が教師の援助を振り返る視点として有効であったということである。援助カテゴリ作成では、保育の中で捉えた「豊かな感性と表現」に関わる子供の姿とそれを支える教師の援助を日々記録し、その援助に名前を付けることを繰り返した。教師の援助に名前を付けるためには、自身の援助の意図やその背景にある子供の姿を振り返る必要があった。そして、その積み重ねは、「感性に関わる援助が少ない」「声かけによる援助が多い」など、自分の援助の傾向を把握することにもつながった。また、保育中にも、今行った援助がどのカテゴリに当てはまるのかを意識しながら援助することが多くなった。

二つ目は、子供の豊かな感性と表現する姿を多面的に捉えて適切な援助を探っていくこと、その積み重ねが、豊かな感性と表現する力を育むことにつながっていたということである。保育カンファレンスの充実が、教師の援助について探り、豊かな感性と表現する力を育んでいく上で大きな役割を果たしていた。具体的には、各担任が個人で作成した援助カテゴリを全担任で見合い、援助の意図を聞き、意見交換を重ねた。その中で教師自身が感性と表現という視点から子供の姿を捉え直したり、その援助が子供の変容につながったのかを振り返ったりすることができた。また、何気ない援助が子供の感性を働かせる姿や表現する姿に影響していたことに気付いたり、その場面におけるよりよい援助について考えたりすることもできた。さらに、公開園内研修会や援助カテゴリ作成時に、大学や他園の先生方にも協力していただいたことでより多面的に教師の援助について考えることができた。これらの積み重ねをその後の保育に活かすことで、子供の豊かな感性と表現する力を育むことにつながった。

2 次年度への課題

援助の振り返りを繰り返すことで、感性と表現に限らず、教師の援助が子供にどのように影響したのかを考えるようになった。ねらいが明確な援助であっても、今、目の前にいる子供にとって必要な援助は他の援助だったのではないかと考えることもあった。また、子供に合った援助をしていくためには、まず、目の前の子供の姿を正確に捉えなくてはならないと改めて実感した。そのためには、まず、教師自身の子供を理解する力を高めていく必要がある。子供を理解し、その後の援助を考えることや必要な援助を判断し、手立てを講ずることが、子供たちの資質・能力を育む上で大切であると考えている。さらに、これまでの研究で、子供が感性を働かせ、表現していくためには、主体的に身の回りのもの、人、ことに関わって遊ぶ子供の姿を引き出すことが大切だということも見えてきた。

そこで、次年度から研究主題を「主体的な活動を支える教師の役割」とし、研究を推進する。一年次は「子供の姿を捉える」と副題を設け、子供の見取りに焦点を当てていく。

講演

令和5年6月15日（木）

演題

「表現する子どもたちと、保育者を見つめて」

講師 愛知教育大学教育科学系 幼児教育講座

学系長・教授 鈴木 裕子 先生

【プロフィール】

愛知教育大学講師、准教授を経て、現職にいたる。

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了、
博士（学校教育学）

専門は保育内容学、身体教育学



乳幼児期におけるからだところの相互作用をテーマとし、身体活動性の増強のための評価尺度開発、幼児間における身体的コミュニケーションとしての模倣の機能と役割、身体的な感性の実証、遊び込める子どもの育成を意図した遊び込める要因と質の高い遊び環境構築、からだを動かす遊びにおける非認知能力の醸成と規定要因などのテーマを追究し、国内外の学術誌に論文が多数掲載されている。

本日の講演の内容

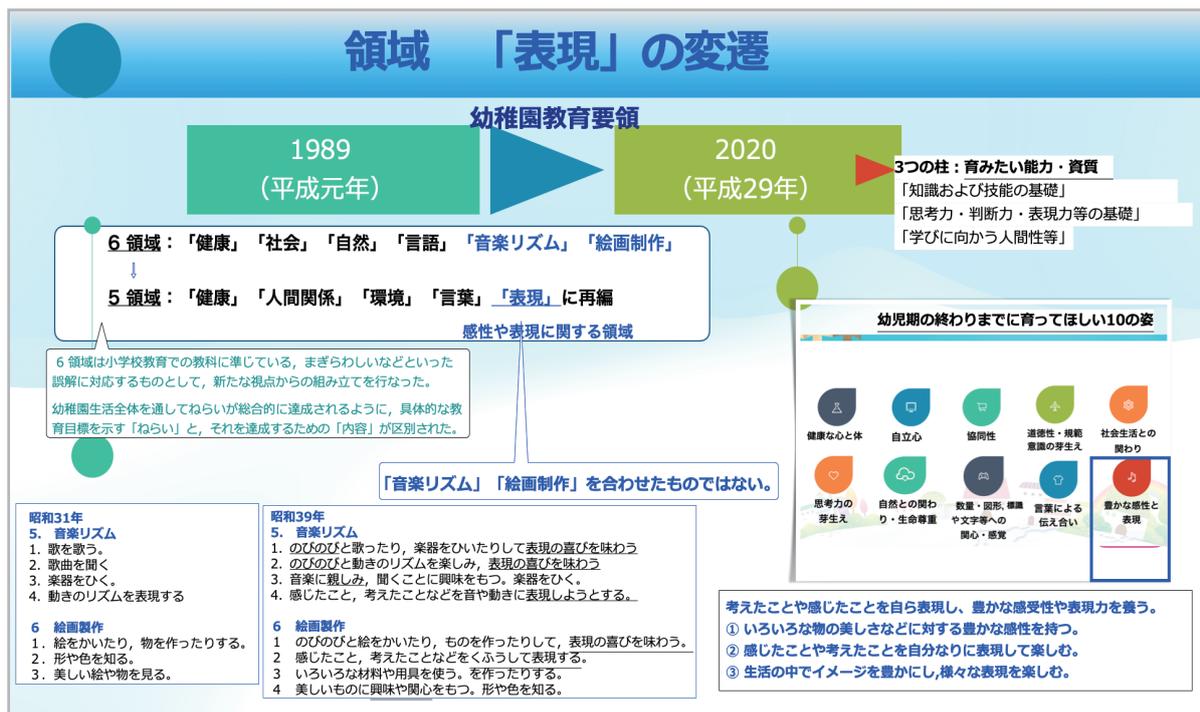
前半は、表現とは何かということについて(1)、後半は、先日富山大学教育学部附属幼稚園に伺って見せていただいた豊かな実践と絡めて、幼児期の感性・表現を考えていただける話(2、3)をしたい。



1. 1 領域「表現」の変遷

平成元年以前には、「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画制作」という6領域であった。その後、「表現」が生まれたが、そこでの考え方は「音楽リズム」と「絵画制作」をくっつけて「表現」にしたのではないとされる。そもそも「音楽リズム」とか「絵画制作」というのは、何を期待しているのかと考えてみると、いずれも大人の文化を子どもに教えるという発想ではないのか。そこで「音楽リズム」や「絵画制作」というのは、子どもにとって何をしていることなのかと考えてみたら、歌を歌うことも、踊ることも、絵を描くことも、物を作ることも、それは子どもにとって表現なのだということが見えてきた。子どもの側に立とうということが、感性や表現の領域の誕生につながった。

表現に対するこういう混乱は、今ではなくなっているのではないか。たとえば10の姿でいうと、10の端に、豊かな感性と表現と普通に書いてある。たどってみれば昭和31年あたりは、まだ歌を歌うとか絵を描くと書いてあり、約10年後の昭和39年になると、「のびのびと」や「味わう」という言葉が見られるが、領域としても音楽とか絵画制作という言葉があった。ここ30年の間に「表現」は、幼児教育では「普通」になったのかなと感じるが、一方で「表現」の研究はあまりされていない。なかなか皆さんが「表現」には向かい合ってくれていない気がして、今回、富山にお呼びいただいてすごく嬉しくて、表現の研究をしてくださることが嬉しくて、自分の能力を省みず伺った次第である。



1. 2 表現「表に現す」

表現とは何か。字面では「表に現す」であり、表す、現すでもあるが、特に子どもの場合は「表に現す」ことではないか。では何を？ それは、表ではなく中にあるものだが、その中にあるものとは、子どもたちにとって、まず感じるということではないか。

難しく考えなくても、感じるときに人間ができることは、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚である。あとコモンセンスといって、総合的に操作する感覚もあるが、身体の外側にあることを受け止めるのは、感じるという行為でしか得られない。感性とは非常にシンプルである。それを表すのもシンプルであり、富山大学教育学部附属幼稚園のテーマのとおり、人間が表現するときに、体、言葉、もの、音以外に外側に出す手段はない。絵を描くといったらもので表す。それらでしか外に表すことはできない。表現とはそんなに複雑なことをやっていないはずなのだが、一方で、そこで起こっていることは、なかなか読み取りにくい。

表現の中には表出と表現があり、それを「あらわれ」と「あらわし」と言うことがある。表出というのはすぐに出てしまう、いわば感情みたいなもの。表現はもう少し意図的である。ただし、子どもの場合は、この2つが分けにくい。表現はExpressionだよねという話を英語の先生として、「では、表出は何？」とお聞きしたら、Appearだと。意味としては、表れてしまうということではないのですか、と言われた。そこに何らかの意味が成され、

出来事として生まれるという状態が起こっているわけだが、子どもの場合、この2つは、出てくるものとしてはあまり変わらないことも多い。

つまり、表現とは、表に現すことであり、全身で感じて、この4つの外側の手段をもってして外に出すことである。それを子どもが繰り返している。ただし、これは非常に文脈として区切りにくく、どこまでが1つかは分かりにくい。

1. 3 子どもの表現は意味を伝達することなのか

さて、そうすると、今、意味を成すと申しあげたが、子どもの表現というのは、意味を伝達することなのか。他者に分かってもらうというのが表現と思いがちだが、では先生たちがしばしば使われる共感というのは、分かるとは違う意味で使っておられるのではないか。

分かるという行為の様相を、受け手とか投げ手、発信者と受信者に例えることがある。これは一見分かりやすいのだが、このように考えてしまうと子どもの場合ちょっと違うのではないかなと思うことがある。発信者から受信者に向けたボールを、投げるというメッセージとすれば、子どもは誰に向けて表現しているのだろうか。ターゲットがしっかりしているものだけではなく、そうではないものもたくさんあるのではないか。キャッチボールにも例えられるが、それでもない気がする。投げ手がうまかったら受け手は何でも受け取れるのかとか、受け手がうまかったらどんな球でも受けられるのかとか、キャッチボールはボールが1個ずつ行くわけだが、子どもの表現はそうではないのでは。

表現という行為で起こっていることを相互行為、循環という言葉で表すことがあるが、循環の方が適切かなとも思う。子どもたちは自己を発揮して表しているが、そこに安心という気持ちがある。相手がどうであれ投げられる、受けてくれそうな人に投げるのではなく、何を投げても受けてくれると思えることが大事である。先生たちは、受け手として存在するから、子どもたちの行為をできるだけ正確に読み取ってやらなくてはと思わなくていいと思う。

先ほどの先生方の発表で、なるほどな、すごいなと思っ



て聞かせいただいたのが、「待つ」という話だった。「待つ」というと受動的に聞こえるが、もっと積極的に受け止めにいくことを含めて「待つ」なんだ、と思えた。子どもたちの表現は、大人が当たり前と思っていることを子ども自身がすることであり、表現は、今、この世界で、子どもがしているものを大人側が表現なんだと捉えることから始めたい。

1. 4 感性とは

私は、以前に「幼児の感性を具体化する試み 幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして」という論文を発表した。英訳する際に、訳者とやり取りして、感性という言葉は Sensitivity としか言いようがないということだったが、Sensitivity というのと、どっちかというのと受けるといふ、感受性というニュアンスが強い。

そもそも「感性」は、すごく包括的で響きのいい言葉だけれど、共通理解できるものがあるのかという悩みを10何年抱えていた。何とかできないかと、目に見えることを捉えて、どのような行動として表れるかを考えてみたいと考えた。感性を定義しようとするのと、どこもかしこも感性の定義は明確にならないとしか書いていなかった。だから、定義の前に、子どもがどういう行動を取ることが感性かを研究してみようと考えた。その結果、大きく分けると「独自の感受と創出」「能動的な応答」「情緒的・道徳的な共感」の3つとなった。

尺度開発という研究方法なので、3つの因子と称するが、一つ目は「独自の感受と創出」。受け止めることと表すこと、であった。これは2つに分かれるのではないかと思っていたのだが、因子分析では2つにはならなかった。大人では「あの人、いい感覚だ」と「表し方うまいよね」は、別の性質だが、子どもの受け止めと表しというのは、そんなにはっきりと区別がつかないものとなった。アイデアが豊かでも独自でなくても、その子なりに、まねすることも含めて表現であり想像力と捉えたらいいのではと考えられた。

二つ目の「能動的な応答」というのは、他者に感情を移入することによって、例えば思わず涙したり応援したり助けたいなどの他人を配慮したり考慮したりする態度のことである。同時に、環境に柔軟に関わるということは、これかなと思っている。

その次の「情緒的・道徳的な共感」、他者に移入することで、約束を守る、ありがとうと言える、社会的な感受性ということである。表現は1人の個人が中から外に出すことだけではなく、社会的に感受する力であり、子どもたちは徐々にその力を得ていく。また、情緒的であるか道徳的であるかということは、目的としては異なっているけど、基本的には、例えば道徳的な規範意識は、思いやりがベースにあると、私は考えている。

この3つが、幼児の感性として、表れてくるもの、目に見える行動と考えられた。ずっと悩んで何とかしたいと思っていて、1つの研究方法と出会い、論文として学会賞を頂くことができた。これを使って何かやったださるという研究に出会うと、ちょっと嬉しい。

話を戻すと、子どもの場合、ため込んでいるものをなかなか出してくれない場合もあるが、私たちは、子どもが外に出すこと、出せるようにすることに、もっと力を注がないといけないのではないかという気はしている。それは、今、子どもたちは情報を操作することはとても上手だが、ないものから自分で何かを表すということができているのかなと思う場面がたくさんあるからである。

1. 5 イメージは過去の経験

イメージという言葉は、いろいろなところで使う。「今日の洋服はあなたのイメージにぴったり」「この商品は会社のイメージアップにつながる」「その音楽を聴いたらイメージが沸く」「その髪型はイメージに合っていない」「イメージが崩れる」などの言い方をする。イメージトレーニングという言葉もあるぐらいだが、トレーニングできるものなのか？

道を聞かれて「あの細い角を曲がって、コンビニがあって、青い看板がある」というのは、その人が過去に自分で得た経験をイメージとして引き起こしているものであり、過去の経験こそがイメージだ。藤岡喜愛という哲学者は、人はイメージを蓄えた世界そのものであり、イメージタンクと言った。

私たちは外界から感覚刺激というのを受け取る。感覚刺激は、知覚によって感情情報として1つにまとめ、それが何であるかを判断する。例えば、赤くて甘いものを見たときにまとめて、これを私たちはバラと知覚する。そして、赤いバラが大好きな人は、バラを見て、「私の大好きなバラだわ。誕生日に、プロポーズのときにももらったから、すごく幸せな気持ちになる」と認知する。意味付けたり感情を付与したりする行為が認知である。常にイメージタンクの中に収めていくこの過程を、人間は絶えず行っている。

そうすると、目の前にバラがなくても、心の中にあるものとして浮かんでくるわけで、イメージがつくられるには、外界の模写性という、バラという外のものによってなぞってつくり上げるイメージと、自分にとってのイメージがある。「I love you」と言われたとき、「私のバラ」というイメージが出てくるのである。

「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」ということが指導要領に述べられているが、生活の中で多様な経験を豊かにして様々な表現を楽しむということによい

と考える。つまり、経験、体験、実感をもたせてあげていくと、過去のイメージと現在知覚していることで自分なりのイメージができてくる。5歳児ならば、自分がこうしたいということは過去の経験から出てきて、目的がイメージになる。子どもにとってイメージを豊かにするというのは、経験を自分で操作していくという、能動的に経験に関わって、その形を変えたり操作したりすることである。子どもの経験を保障して、それに向き合わせてあげるといふ経験をより多くすることが、イメージを豊かにするということである。ただ、子どもの特質として、どんな思い付きや印象でも、生きた形象や行動へと具象化したがる。何でもやりたがり外に出すということであり、そのため、子どもはイメージを湧き起こす段階ではさほど苦勞していないと言われる。大人のようにイメージが湧かないといったときには特に芸術活動の場合に、湧かせる体験みたいなものをトレーニングすることに重点を置くが、子どもの場合多くは、イメージは豊かに見える。それは、外界模写性に対する独自の自分なりの意味付けのようなもので、すぐに表現するためである。

また、私たち大人は、実際に自分が経験していなくても、知識というものから、こうあるべき、こういうものだという考えが表現を導くが、子どもの場合はほとんどそれがない。それが大人から見たら大人にはない豊かさに見える。大人がゾウさんを表現しようと思ったら、大体こういうものだと考えて想像するが、彼ら、彼女たちは、こういうものだ、ではなくて、自分の体験から得たものから感じたことを意味付けする。ゆえに独自に見える。そこで、大人が早回りして、子どものやっていることを代弁してしまうと、子どもは、本当は名前にもならないことをやっていたかもしれないけれども、名付けられてしまい、それ以上のものにならないということもある。

1. 6 「見立て」表現

さて、子どもは表現しているときに、見立てたり、いわゆる「ごっこ」というものに展開していったりすることがある。子どもたちの生活の中にはその場面がたくさんあり、そこでは、行為の結果として表れてしまう偶然があったり、偶然のものを偶然に変えていったりすることをしている。それを感覚にとどめずに、言葉みたいなもので表すこともある。

たとえば、砂場でお団子を作る場面、最初からお団子を作ろうと思っているわけではなくて、たまたまできた丸いものが自分のイメージと結び付いて、「お団子」と名付ける。口に出すかどうかは別として名付ける。その段階では、逆にお団子以外のものを一旦引っ込める。もしかしたら他のことを思っているかもしれないが、「お団子」とした段階で他の名

前は一旦引っ込める。次に、お団子をごろごろと丸めたり、ぺたぺたと何かをくっつけたりするのは、つまり、お団子に意味を付けていくという行為をしている。このような過程が、ごっこ遊びの展開であり、この時期の独特な表現活動である。

私はそうした表現の中で、特に人に真似されるという、模倣される子どもの研究をした。模倣されることによって、自分のやっていることを名付けたり意味付けたりすることを逆説的にやっていた。遊びの中は、そんな表現の繰り返しである。遊び＝表現、表現＝遊びというぐらい、子どもたちは表しながら遊び、表すことが遊びになる。

1. 7 子どもの表現の特性

平成元年領域「表現」発足当時、先生たちが苦しんだのは、何かを教えたり設定したりしたところから生まれたものは子どもの表現ではなく、あるがままの子どもの姿が表現であり、それを受け止めることだけが保育者の責務という考えが蔓延ったことである。大人は何もしてはいけないということになり、極端に言うと、はさみは使い方を教えては駄目で、子どもがはさみに興味をもったら、それとなく関わるということになった。ちょうど私が、幼児期の身体表現を研究し始めた頃で、「こんな流行らないことをやりたい?」「要するに、先生が仕込むんですよね」と、ある幼稚園で言われた。なぜそういった論議が起きたかという、子どもの表現は見れば見るほど不思議で、子どもは、上手な絵を描こうというわけではなく、表現したいから表現している。それは最初に言ったように、自然に表れてしまうからであろう。ただし、そこを引き出してあげることも大事かと思う。表現のスタートは、その環境であり、附属幼稚園の先生たちのテーマはまさにぴったりで、も

の、人、こととの出会いを通じた偶然の出来事が多いのもそのためである。

特に身体ということから見たときに、ほとんどの場合、表現する素材と表現しているものが一致している。難しい言い



方をすると、主体と客体が同一ということで、今、ここで表現が成立する。もちろん絵を描いたりするとその絵は残り、歌は楽譜に落とせば、今ここ以外のところでも生きるわけだが、子どもたちは絵を描いていても、描いている自分と紙みたいなものが同一であると感じる特殊性、その臨場感の中で表現が行われている。それは、先生たちの目の前でいっぱい起こっており、事例としてたくさん出ている。

それから、四つ目の大きな柱として、子どもの表現は、経験の再現が多い。子どもたちはすごく空想豊かに見えるが、実際には自分の少ない経験を知識という枠組みにとらわれないで再現しているので、大人にはないダイレクトさがある。もの、人、ことを自分の知っていることに紐付けながら、自分なりの物語をもって表現するというをしている。

私が以前に関わらせていただいた園で、年長さんがお化け屋敷をやりたくて、お化けトンネルを作った。ある男の子が、ダンボールのトンネルに穴を空けゴムを張り、蜘蛛の巣にした。彼が手に持っている、蜘蛛の巣にのっている蜘蛛をぱっと放すと、ぴゅんと音をたてて蜘蛛の巣に絡むようにして、中を通っている子を脅かすという仕掛けだった。最初は、すごい勢いで中に入った。すると、「ちっちゃい子、3歳さんと呼ぶと怖がるよね」とみんなに言われた。しばらく考えていろいろやっていたが、最終的には、彼はゴムを密に張り巡らせ、ゴム間のすかすか部分を減らした。そうすると、蜘蛛を飛ばしても、蜘蛛の巣が、トンネルの奥まで入り込まないで、一瞬クモの巣が揺れるようになった。それは3歳さんを怖がらせないようにしたいという思いがあって、自分の経験の中で、どうしたらいいかといろんな情報を引き出してきて、やりながら考えたようだった。試行錯誤したのだ。これはまさに5歳的なのだが、表現するといったときに、思考が絡んできて独自のストーリーが生まれるレベルになっている様子が見られた。

2 富山大学教育学部附属幼稚園の様子から

私は5月30日に附属幼稚園に伺ったが、雨が降ってきてしまって、ほとんど室内遊びだった。本当に楽しく見させていただいた。そこから2週間が過ぎ、もしかしたら状況が大分変わっていることもあるかなと思うが、私が見させていただいた中から、表現というのをどう捉えるのかという視点でお話しさせていただこうと思う。

2. 1. 1 3歳児の姿から

水遊びの場面。私は、この3歳児の姿を、表現と捉えたら何が見えてくるかなという目

で、この日は見させていただいた。3つのキーワードで説明できるかなと思う。

まず「身近」。素材が身近なもの、それに「感覚」的に関わるという行為をしている。三つ目が「興味と面白さ」の行ったり来たり。面白そうという前提で関わるのか、やってみたら面白いというイメージが湧いてくるのか、あるいはどこかにあったイメージをもってきているのか。なかなか深いと思って見ていたの



で、未だうまく解釈できていない。先生の援助としては、特別なものではなくても偶然性がいっぱい起こるものを環境として与えているということが背景にある。

この事例は、この子だけではないが、皆ほとんど言葉は発していない。3歳は本当はそのうのだなと思って見た。まず、ピンクのゾウのじょうろを持って水を入れ始めた。このときに彼女は、水をうまく入れるということ、あるいは水をうまく出すということにしか関心がない。関心がないというか、そこに関心が集中している。別の子どもたちが回りにやってくるわけだが、それぞれいろんな容器を持って水を入れていた。しかし、彼女は特にそれに対して何も言わない。その後、流れ出ている水の出方に気が付いたようで、ひとしきりそれを続けていた。あふれる水の動きに関心が向いたようだが、このときも他の子にそれを示したり、ほかの子に関わったりすることもなかった。

ひたすらバケツに水を入れるために、今度はゾウの傾け方に関心が移った。このゾウのじょうろをどういうふうに傾げるかというか、大きなたらいに入れるときと、その下にある緑のバケツに入れるときの傾け方みたいなものを何回かちょろっと試す。3歳の運動能力としては、この加減は難しいだろう。暫時的な力調整というのは最も大きい課題であるから、なかなかうまくいかないが、何とかこの小さい緑のバケツに入れようとした。それをひたすらやっている。でも一言も発さない。お水がもったいないなんて言っちゃ駄目だなと思いながら見ていたら、いろんな子どもが来た。しかし、他の子は小さい別の容器を持っているので、それとの違いみたいなものも分かるようで分からない。何となく人がやっているのを見ると、いわゆる三項関係なのだが、他の子からの、言葉には出さないが、「見て」という雰囲気が見て取れる。この「見て」という雰囲気についての研究はたくさ

んあるが、私とあなたのために、ものやことがあるんだよ、それを一緒に見ようという思いがある。ただ3歳の場合、見てくれる人がいなかったからといってやめない。この一連の行為を、表現として実に面白いと思って見ていた。

この間、一言も彼女は言葉を発さないし、独り言みたいなことも言わない。そもそも独り言とは何かと考えると、ヴィゴツキーという学者は、外言、外に出る言葉がまず発達して、それから内言を使うようになっていった。心の中に思ったことを言葉に出しているというよりも、言葉を言った後で中に戻すということを行っている。それがつまり子どもたちの表現するときの様子ということであるが、その外言を内面的に持ってくるのが、思考ということ自立化させるという発達と言った。だから、こういう小さい子どもは、頭の中で思考してから言葉を発するのではなくて、言葉の意味の使い方もよく理解しないまま口に出している。何となく表現して他人とコミュニケーションするうちに、言葉を身に付けている。独り言はほとんど内的な発話であるし、心の中の言葉とされるが、言葉がない状態で、彼女はこの3つのキーワード「身近」「感覚」「興味と面白さ」で遊んでいた。

では、なぜ語らなかったのかというのは、先生たちはお分かりだと思うが、語る必要がなかったからだ。語れないわけではなくて、言葉がこのときの表現の媒体ではないからだ。言葉がなくてもいい、ものと人との関わりみたいなのが3歳の表現の中であふれていて、これをよく「遊び込む」と言う。3歳の「遊び込む」はなかなか難しいのだが、「台風の目のような渦を巻いている、その空気感が面白い」として「遊び込む」にした先生がいた。

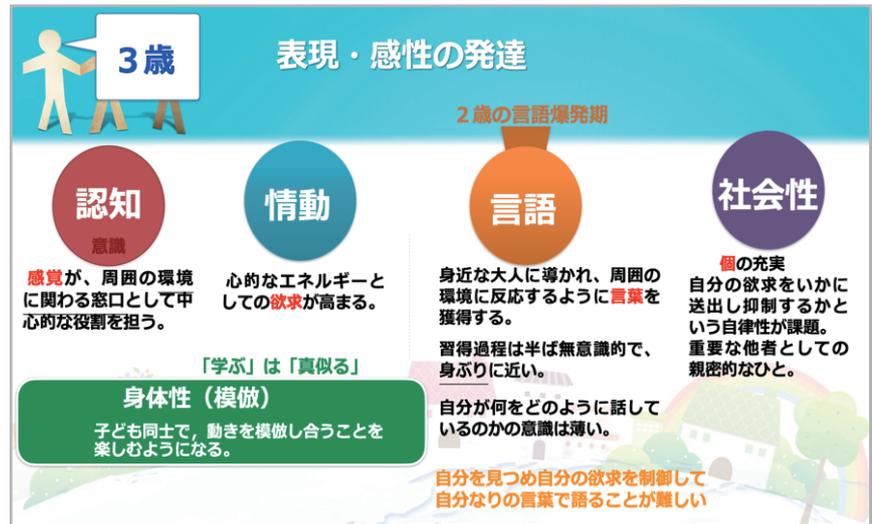
「遊び込むためにはどうすればいいの？」と聞いたら、「植木職人になれ」と言われた。植木職人は、植物の松とお花の菊を扱う。待つことと聞くこと。そういう職人の気分でやったら、きっと子どもの「遊び込む」の援助になるとおっしゃった。

ただ、何となく「遊び込む」という状態は、この3歳を見ても分かるが、2種類あるかなと思っている。言葉がなくてもいいような深く没頭するようなものと、どちらかというと高揚感というか盛り上がるみたいな雰囲気「遊び込む」という状態がある。外国の研究者が日本の幼稚園を見ると、かなり騒々しいというか、にぎやかとよく言われる。日本の感覚はどちらかというと、黙々とするよりも、みんなを巻き込んで盛り上がる方が「遊び込む」ということに合っているのかな、そういうことを求めているのかなというふうに感じた。ただし、3歳は没頭するとか、ある種ルーチンにとどめなく流れている、その中で、子どもたちが表現として行為を発していると思った。

2. 1. 2 3歳の表現・感性の発達

では、3歳はどのような時期か。表現というものを見るときに、認知、情動、言語、社会性、身体性といった柱から、子どもが今どういう状態にあるのかなと考えてみると、私としてはすっきりというか、落ちると考えている。

今回、この3歳を見ていて思ったことであるが、認知という面。認知とは意識。どういう意識をもっているかと考えてくればよいのだが、それはもう本当に、感覚という受け止め方をしていると思った。つまり、周囲の環境と感覚的



に関わり、それから、情動として、心的なエネルギーとして欲求が高まる。自然に湧いてくるような欲求であり、彼女の場合、目的があって何かをしているというよりも、今まさに、その場面で、じょうろに水を入れるという表現がしたいという欲求である。

次に、言語という点。3歳児クラスの先生が、この子は言葉が少なくなったみたいなことをおっしゃるときがある。2歳は言語の爆発期とよく言われて、2語文とかをどんどん話せるようになってくるのに対して、3歳になると一瞬言葉が減ったように思うことがあるが、それは言語学者に言わせると、言葉の文節が増えてきて、それが一言二言では済まなくなるので、なかなか言葉が出にくくなる時期があり、それが大人から見て「減った」と感じられると言われている。しかし、いろいろな言葉を使うようにはなる。ただ、この使い方は非常に無意識的で、身振りに近いような形で言語を使っていると言われる。

社会性は、3歳のこの子の表現もそうだが、個の充実を評価するというか、先生たちがそこをすごく大事に見てあげることが大切と考えられた。安心ということが個の充実には大きく関わる。表現には正解がない。子どものする遊びは全部そう思うが、正しいとかうまいとかというよりは、それを受け止めてくれる他者である先生の受け止め方や、存在そのものの意義が大きい。それによって個が充実させられる。

ここまでだと発達心理学の人たちの区切りであろうが、私は身体性というところから見るのが癖なので、いわゆる身体の模倣ですが、3歳では、子ども同士でそのことを自然にやっている状態が、表現ということに生かされている。

3歳の先生だけではなく4歳、5歳でもそうだが、少しずつ求めるものが変わってきたとしても、やはり原点として、このような無意識的な部分から表れてくる表現も受け止めてほしい。同時に「待つ」ことが必要なのは、今回の3歳の表現の発達からも言えるが、今回の3歳の富山大学の幼稚園の事例から、私はすごく面白く見させていただいた。

2. 2. 1 4歳児の姿から

4歳児で意識できたのが、「自分」つまり私、「記憶」「物語」という言葉だ。

これはいわゆるダンスショー。マントやスカートを着て、部屋の真ん中でダンスショー。そのとき担任の先生は、楽しいねといった雰囲気や心で発していると感じられた。失礼ながら一番楽しそうなのは先生という感じだったが、それは子どもたちにとってす



ごい安心材料となっていた。彼女たちの動き、この子なんかはスカートを穿いて動く所作がすごくキュートだった。いわゆる「なりきる」だが、どこかの瞬間から一連のしぐさがとっても豊かに見えた。ドレスを着て音楽がある。それだけで、それを通して自分のイメージが実現できているという大きな喜びや自信になっている。子どもが高揚していく感じとか、仕草までそれになる姿から、自分のイメージを自信をもって表現できている姿と私には見えた。きっとどこかで見たすてきな映像や絵に、ちゃんと自分らしさを組み込んで、全身でなりきる表現をしている。再現というプロセスに自分らしさを組み込んでいると、私の中では説明がついた。

また、部屋の真ん中という空間が何か面白いなと思った。四方八方から見えてしまうという空間、運動会のような状態だが、こういうのもまた子どもにとって、この環境自体が違う意味を与えていると感じた。とても素敵だなと思って見させていただいた。

もう1つのクラスでは製作をしていて、いろんなコーナーを作っていた。ものを作ると

いう表現に関して面白いなと感じながら見させていただいた。自分で作ったものを使うという場面、作ったから使う、使いたいものを作る、使わないでひたすら作る、という、そういう場面がこの部屋の中に、煙のようにいろいろ立っていると受け止められた。

この写真では、箱でブタさんの顔を作っており、使いたいものを作るという感じなのだが、そこで担任の先生は何をしていたかという、比較的静かに寄り添っていた。ちらちら見ていた。子どもたちが気配を感じ取ったりできる先生の視線自体に寄り添いがあった。

その周囲の子どもも同じように作っていて、ここでは3歳児と違って多少言葉が発せられた。何々みたいにしたいとか、こうしたら何とかできるよと、会話まではいかないが、ぼんぼんと言葉が飛び交っていた。そこではものを介して言葉がやり取りされ、それに伴って表現がやり取りされるということが、自然に起こっていた。

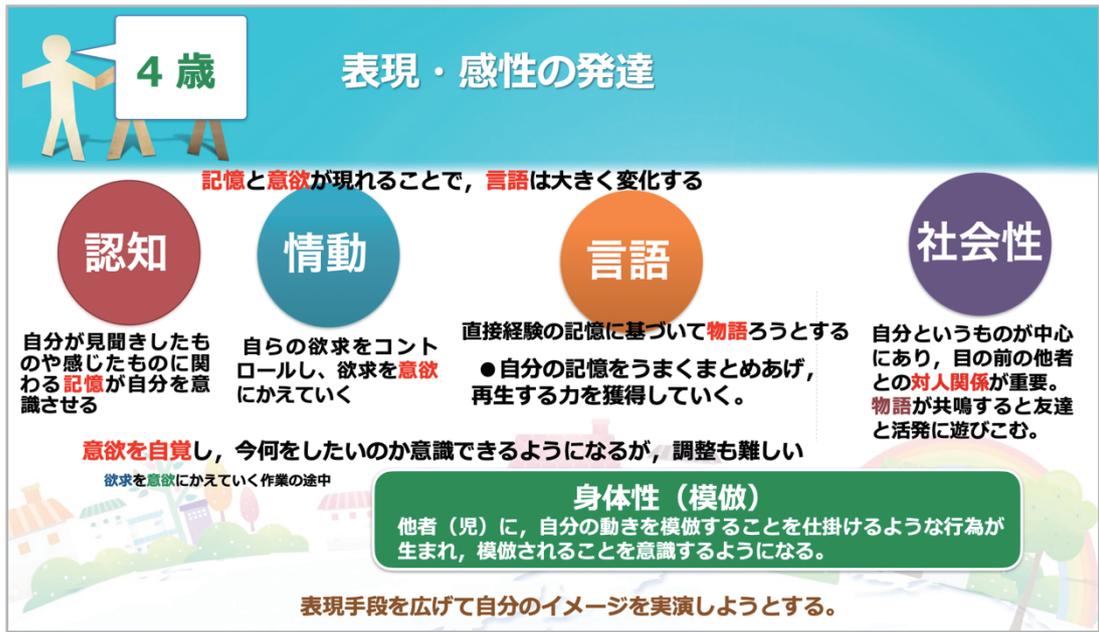
そこでも“見せる”ことをしていた。3歳の子は自分自体を見てほしいという意味合いの“見て”だが、この時期になると、ものを介してそれを見てほしいという感じであり、作った後で見せるだけではなくて、途中で何回でも見せてくれていた。

製作の援助について、よく言われるのが、先生はあまり宿題を出さないほうがよいということ。「いいね、すてきね。でも、もうちょっとこうやってみたら」みたいに言うと、子どもは多分、その後あまり見せなくなってしまう。方法を知りたいとか改善点を知りたいわけではなくて、ここまでやったよという思いを伝えたい。ただ関心がないと思われぬようにすることは大事で、もちろん先生たちはいつも心を砕いておられると思う。

ある女の子はベッドを作った後で、それを使って赤ちゃんを寝かせて遊んでいたが、イメージの関係をつくっていて、表現するということに対して自信に溢れているなどと思って見させていただいた。こういう女の子のごっこ遊びからは、ものが他の人との共感や交渉を取り持つ役割をすること、ものを作ることが表現であることも読み取れる。つまり、これは作業ではなく、この子たちの表現だということを実感できる。

それから、身振りとか言葉が伴うと、ものに意味が付与されていく。身振りとか言葉が、多様な表現機能を担う働きをしているということも見えてきた。成果物が問題ではなく、そのプロセスが表現なのだということをつくづく感じられた場面であった。男の子たち、ダンスショーもそうだ。作ることにすごく独特な表現世界があると見させていただいた。

2. 2. 2 4歳の表現・感性の発達



認知には、「記憶」が大きく関係していた。「記憶」とは遠くの昔の話ではない。イメージのところでお話ししたように、自分が見聞きしたものと感じたものを取り出す記憶だ。それは自分というものが意識されていく基盤になっている。4歳の2つの遊びを見て、この言葉がキーワードと考えられた。

情動では、3歳の「欲求」に対して、4歳では、「意欲」みたいなものを自覚していく姿が見られた。作っているうちにも変わることは幾らでもあるが、作るという意欲が生まれている。何をしたいかが少しずつ意識できるようになり、表現手段を広げて自分のイメージを実現していくことを、今、している。一方で、彼らには表したくても媒体、材料がない、考えつかない場合もある。作る、生み出すための表現媒体、表現手段というのは大人が保障していかないといけない。放っておいても子どもは表現しているよということであつたら、何も教えなくてもいい、何も与えなくてもいいことになり、それでは、領域「表現」発足のときに沸き起こった物議に戻る。私は、「保障する」ということの意味を納得して実感しながら見させていただいた。

言語は、記憶をまとめあげ、自分なりの「物語」になっている。女の子が赤ちゃんを大事にして、その「ごっこ」に明らかな物語性が生まれていることからわかる。そして、今までは言葉が足りないため補っていた身振りみたいなものが、表現の手段として使われてきているということも、この4歳の2つの事例から納得できる。

身体性では、模倣研究をしたときに面白いなと思ったことだが、自分のしようとしていくことが分かってくると、相手にそれを少し仕掛けるというか、投げかける。模倣してくれることを少し意識しながら相手に投げかけるというのが、明らかに3歳にはなかった行動として4歳では見えた。他者を通して自分を意識していく。意識的というのは、他児がまねしてくれたのを見て、自分ってこういうことをしていると感じられることである。

先生の援助としては、その子と同じことをする、横に並んで同じことをするというだけでも意味がある。先取りして子どもがしそうなことをやらなくても、今あなたがやった、同じしぐさをする。これは特別に支援が必要なお子さん、いわゆる自閉的なお子さんなんかだとこの部分が弱いので、一緒に隣にいて真似してあげる。真似されていることが意識できるようになれば、彼らにとってはすごい発達なのだが、4歳のこの時期も先生たちの援助としては、そういう橋渡しがあっていいのではないかと思えた。そうすると、そこにキーワードとしての偶然ということが起こってくる。このことも実感できた。

社会性としては、「対人関係」だ。対人の関係の中で物語を共鳴させていくということが、4歳児の表現である。

子どもたちの表現手段を広げるためにはどうするか。「何食べたい？」と聞いたら「ハンバーグ」「カレー」と答えるというのは、それ以上知らないからだ。もう1個知ればもう1つ表現手段が増えるというふうに、表現の幅を広げてあげられる。真ん中でダンスを踊ると周囲から見られる、舞台とは違う、ということから、表現の手段を得ていく。それは教えるのではなくて、先生方がやっておられたように、そこにその環境を置くことに尽きる。

2. 3. 1 5歳児の姿から

忍者屋敷で遊ぶ5歳児からは、「動機」「一緒」とか「共通性」、「双方向性」と、その表現の中に「思考」というものが表れてきていた。この部分が生まれてきているのは圧倒的に5歳児で、この事例も圧倒的に5歳であった。

見せていただいたこの日の前日にできたのが手裏剣的的。その日は、忍者の修行をしなくてはいけないという動機が生ま



れてきて、修行をするためにどうすればよいかとなり、木の枠組みで忍者屋敷を作り始めた
と聞いた。忍者屋敷と思って作っている子どもと、いやいや何かできてきたよねという
子どもと、いろいろな子どもがいるようであり、何となく共通的なものを双方向的に固め
ている感じがした。この事例では感動すら覚えたが、先生は「来週以降で徐々に徐々に、
多分これは夏ぐらいまではずっと続くでしょうね」とおっしゃっていた。あれから2週間
たってどうなっているかなとわくわくしている。

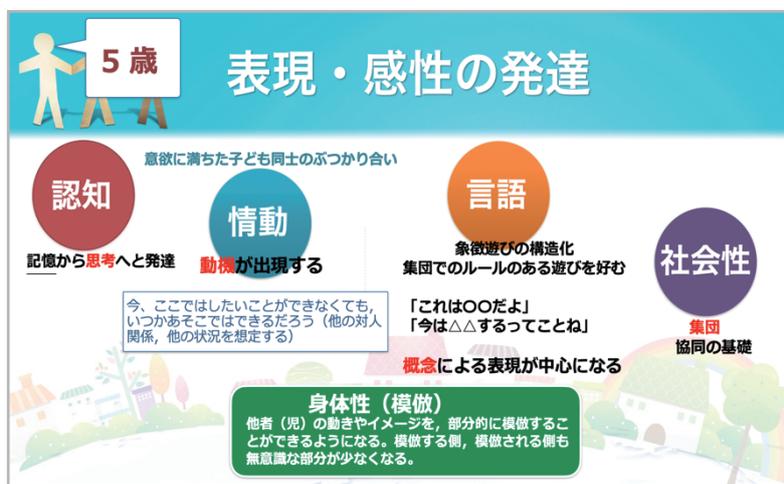
この日、いつの間にか段ボールの屋根がついていた。「忍者の屋敷どうしたらいいかな」
と、ものを触って試行錯誤する中で段ボールが出てきて、こうなったそうだ。段ボール屋
根の上をたたくと、中にいる者が、音がするという事に気付く。それが感覚的な遊びと
して楽しくなっていたところこの日は終わったが、子どもたちは何を表現しているのだ
ろうと考えた。自分の心の中で自分の視点と他者の視点を踏まえながら、いろいろ考えて
いた。だから、「双方向的」であり「一緒」でもあると見てとれた。これは子どもの特技だ
と思う。最初からあるわけではなく、この子どものように、屋根のないところで伸びやか
に寝転んではみたけれども、この子どもなりのこれでよいのかが生まれ、見られている他
者の視点というのを意識した。それを踏まえながら考えて表すということをしている。

先生たちが指導案にお書きになるのは、イメージの共通性というか、共通なイメージ
をもって向かう、のような言い回し。このとき、起こってきた偶然と、今までの彼らの経
験によって蓄積されたイメージが行ったり来たりする、循環するための刺激媒体として、
ものや環境というのが生かされていると、すごく感じとれた。

2. 3. 2 5歳の表現・感性の発達

5歳での認知は、記憶した
ものを「思考」するという段
階であった。

情動では、「動機」が出現す
る。3歳は「欲求」、4歳は「意
欲」、5歳は明らかに「動機」。
これを目的とも言うが、最初
からあるわけではないのか
もしれないが、ここでの5歳



でははっきりした動機が出現している。これがぶつかり合うということによって、トラブルも4歳以降増える。動機が必ずしもみんな一緒ではないからだ。そのエネルギーはすごく強力で、それがぶつかる。しかし5歳になると、今ここではできなくても、いつかもう少し先ならできるという他の状況もいろいろと想定できる。今自分はこれがしたいけれど、みんながまだしていない、だったらもうちょっと先でもいい、明日でもいいかなど、表現の持ち越しができる。先生は、そこに見通しをもつということが必要なのかもしれない。

言語としては、象徴遊びの中で、明らかに言語が生まれて構造化している。これって何とかだよ、今はこれって何々するということだよ、というような意味付けや名付けを頻繁にしている。これは「概念」による表現が中心になるということであり、共通の目標とはそういうことを指すだろう。みんなが共通に分かるということは、「概念」としての表現が中心になってくるということ、今回の事例から実感した。

社会性は、「集団」である。協働の基礎として、複数の子たちが入り乱れて何かをするという状態である。

身体性（模倣）というところから見ると、イメージの切り取りというか、丸ごとあるものを受け止めて模倣するのではなくて、部分的に切り取る。それは、つまり動機や思考が支えになっているのではないかと見てとれた。

この事例は、本当に圧倒的に5歳だと感動した。キーは「思考」であり、表現の中で、思考して試行錯誤していた。けれど、最初からうまくいくかといったら、「動機」が高まってきて、エネルギーも満ち溢れてくるので、ぶつかり合いも増える。先ほど先生方が、失敗を失敗にしない受け止めということをお話されていたが、同様に、大人から見たらそれはトラブルかもしれないけれども、子どもにとっては今この動機に対して試行錯誤する過程であり、そこを通ることが必要。それには時間がかかる。「待つ」ということが見えてくる。

3 表現を教える？

子どもの表現に対して、先生が何もしなくてもいい、しては駄目という平成元年に領域「表現」がつくられたときの思い込みのようなものは、子どもは表現を自然にするものだから、だったら教える必要はないよね、子どもの生活は全部表現なのだからというようになっていた。しかし今、そうではないというのは、皆さん分かってはいる。ではどうするか。

子どもは、「もの、人、こと」と常にやり取りしている。表現はもの、人、ことでしか表

せないわけだから、当たり前と言えば当たり前なのだが、ここをじっくり見ようというこ
とで、この言葉が近年クローズアップされてきたのだろうと思う。

今まで3歳、4歳、5歳、いろいろ見てきたが、子どもたちの出会い、つまり、もの、
人、ことに出会っている状態にまず先生が気付くこと。見過ごしてしまうことのほうが多
い。特に成果物として表れないと何となく見にくいのだが、先生が気付き、それを認める
ことがまず大事だと思う。そのためには子どもたちの言葉を拾う。言葉にならない身振り
も含めて、それを拾う。そして受け止める。簡単そうで、なかなか難しい。

もう1つ。共振・共鳴という言葉があるが、子どもに添って一緒にやってみる、同じこ
とをしてみる。そのときの子どもの表情やその背景みたいなものを読み取るというか感じ
取るという先生の感受性としてのアンテナが要る。

それから、子どもの感じていることをそのまま語る。感じているなと思うことを語って
やる。代弁したり先走って決めつけしたりしない方がいいし、感想を言わなくていいから、
子どもが今思っているだろうことをそのまま語ってみる。「何作っているの?」「これは何?」
と聞いてしまうと、遊びの理論と一緒に、名前のないことがいっぱいあるのに、無理やり
名前を彼らがつけることになるので、それ以上発展しないということが起きる。「いいね、
もう少しこうすれば?」のようなことではなくて、「いいね、お話聞かせて」ということで
誘う。これによって、子どもたちは、自分の視点と他者の視点を行ったり来たりさせなが
ら、自分で、表現をするという行為を感じていく。

何度も申し上げたが、表現に正解はない。けれど、形になって目に見えてくれば、良し
悪しをつけたくなる。評価をしなければ次に行けないという考えだと、正解みたいなもの
を求めたくなる。上手い、下手はあるかもしれない。出てきたものにそれが生まれるかも
しれないが、正解、不正解はない。

それから、先生たちの「偶然」というものの生かし方。これは、想定外の面白さに寄り
添えるキーワードだと思う。身体表現は、先生たちが一番苦手な表現とよく言われる。つ
まり想定外が多すぎて、偶然があり過ぎるから。その想定外や偶然が目の前で消えてしま
うので、そこで援助しろと言われても、もう目の前にないものでは難しい。3歳の彼女の
ずっと水を汲んでいたのも、その瞬間で終わっていて、それを振り返って見ることはでき
ない。偶然起こってきたことの中から子どもがきっかけをつくっているのだと思えたら、
先生は、想定外が面白くなり、きっと楽になる。

「表れたものは差ではなく違いとして見る」私はこの言葉が大好きで、いろいろなとこ

ろで話す。一人一人を見ると言うが、その一人一人の何を見ているか。1人と1人の差を見ていないだろうか。そうではなく、1人と1人の違い、この子の表し方、この子の受け止め方を、違いと取れるといい。一人一人を大事にと言うが、1人と1人を差として見てしまうと、表現に正解や不正解が生まれてきてしまう。

そこでは先生たちが、教えるというのではなくて、子どもの表現であるということに気付いて、受け止めるところからスタートしてほしい。たとえば、雨垂れがポツンポツンと落ちてくるのを、首を振ってずっと繰り返している子どもがいる。これは音楽なのか。音楽の芽生えと取れないだろうか。そこに子どもたちの表現があると考えてスタートすると、先生たちは、もう少し楽に表現という保育を楽しめるのではないかなと思う。

この研究をぜひ続けてほしい。それを進めてくださっている富山大学附属幼稚園の先生方、後押ししてくださっている大学の幼児教育の先生方に敬意を表しつつ、ぜひ広めてほしいと願っている。

おわりに

本年度は、研究主題「豊かな感性と表現する力を育む ― もの、人、こととの関わりの中で ― (二年次) ～教師の援助を探る～」とし、一年次の研究で有効であった記録の蓄積、視点を基にした教師間での考察を行ってきました。子供の感性や表現する力をより豊かに育てるためには、日々の子供の姿を見取り、状況に応じた環境を構成し、適切な声かけを行うなどの援助が重要になります。子供の柔軟な発想を受け止め適切な援助を行うには、教師の準備が重要と考えました。

そんな中、本年度の保育フォーラムでは愛知教育大学 鈴木裕子先生のご講演の中で、「表現はもの、人、ことでしか表せないわけだから、ここをじっくり見る」と語られ、そして「もの、人、ことに出会っている状態にまず先生が気付くこと」、「子どもの感じていることをそのまま語る。感じているなと思うことを語ってやる」「子どもに寄り添って一緒にやってみる、同じことをしてみる。そのときの子どもの表情やその背景みたいなものを読み取る」という、子供が「もの、人、こと」に出会った後の援助として有効なものをご教授いただきました。さらに富山大学の先生方に専門的な立場からご助言いただくうちに、このような援助の手立てには同じような手立ての種類や性質があり、これをまとめることで場に応じたよりの確な援助ができるようになるのではないかと考え、援助カテゴリの作成をしました。そして、自分の援助がどのカテゴリに当てはまるのかを意識しながら援助することで、援助についての振り返りや次の援助を考える上でも有効であったと感じています。その中で、豊かな感性と表現する姿を多面的に捉えて適切な援助を行うことで主体的に遊ぶ子供の姿を引き出せることに気付きました。

来年度は、本年度の研究から考察したことや成果と課題を受け、「主体的な活動を支える教師の役割 (一年次) ～子供の姿を捉える～」とし、本年度明らかになったことを活用しながら子供の姿の見取りに焦点を当てて研究を進めていきます。

終わりにりましたが、私たちの研究にご協力、ご指導くださいました大学の先生方をはじめ、関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

今後とも皆様のご助言、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

令和6年3月

副園長 藤井 昭彦

◆指導助言者

愛知教育大学 教育学系 幼児教育講座 学系長・教授 鈴木 裕子

◆県内 小学校・幼稚園・保育所・認定こども園 研究協力者

富山市立水橋幼稚園	副園長	柏原朝子 (3歳児)
新保なかよし認定こども園	副園長	佐伯由希子 (4歳児)
上市町立相ノ木小学校	教諭	舟林美乃 (4歳児)
認定こども園福野青葉幼稚園	園長	唐嶋田鶴子 (5歳児)
富山大学教育学部附属小学校	教諭	中村健志 (5歳児)

◆富山大学教育学部幼児教育研究会 研究協力者

富山大学教育学部	教授	小林 真
富山大学教育学部	准教授	月僧 秀弥
富山大学教育学部	准教授	西館 有沙
富山大学教育学部	准教授	若山 育代
富山大学教育学部	准教授	増田 美奈
富山大学教育学部	講師	近藤 龍彰

◆研究同人

園長	黒田 卓				
副園長	藤井 昭彦				
教諭	川越 香奈子	金谷 奈緒	陽 弥生	鶴見 真理子	
	村松 葉子	中尾 智子	山口 初音		
講師	濱谷 昌代	神川 瑞子	石田 晶子	石井 朋子	
	中田 良子				
主事	岩田 郁代				
用務員	山根 暁子				
事務員	神保 ともみ	松本 朋子			

研究紀要 第49号

豊かな感性と表現する力を育む

—もの、人、こととの関わりの中で— (二年次)

～教師の援助を探る～

令和6年3月

編集 富山大学教育学部附属幼稚園



富山大学教育学部附属幼稚園

〒930-8556

富山県富山市五艘 1300

TEL : 076-445-2812

FAX : 076-445-2814

E-mail : fzkk@edu.u-toyama.ac.jp

URL : <http://www.fzkk.fuzoku.u-toyama.ac.jp/>



幼稚園 HP QRコード↑